

平成30年度

布教
羅針盤

ふきょう
らしんばん

所求・所歸・去行

所求——極樂往生を
目指して◎2

浄土宗

平成三十年度 布教羅針盤

所求・所帰・去行

所求——極樂往生を目指して 2

はしがき

もう十年ほど前になりました。浄土宗総合研究所で「僧侶に対し求めるもの」を調査した結果、第一位が「人徳の高さ」であり第二位が「法話が上手」ということになりました。

我々僧侶に求められていることは世間一般的には「お葬式を勤めてくれる」「法事を勤めてくれる」という回答が圧倒的ではないか、と思っておりましたが正鵠を射ていないということでもあります。「人徳の高さ」ということの評価はそれぞれであると思いますが、「法話が上手」というのはどういうことか？ 大勢の人々の前で仏教の話をし、理解・納得してもらいうことでありましょう。布教師によつては、漫談的な語り方をしたり歌をうたつたりと、伝える方法は様々ですが、何より大切なことはその内容で、我々浄土宗僧侶ならば、法然上人のみ教えをいかにお伝えするかということに他ならないと思います。

そういった意味で、毎年発刊しているこの『布教羅針盤』の果たす役目は大きいということになります。

浄土門主猊下の「教諭」があり、その「教諭を拝して」を熟読され、身につけていた
だきたいと考えております。

浄土宗では、ご承知のとおり六年後に開宗八五〇年を迎えます。八五〇年を記念して
何かイベント的な行事があるのではないか？と思われる方もあるかもしれませんが、そ
れはまだ考えておりません。浄土宗百年の大計を思量し、「僧侶いかにあるべきか」に
想いを巡らせ、方針を立ててそれを目指してまいります。

本書は開宗八五〇年のご正当までは、「凡入報土（救われていく道）」をテーマとして
進めてまいります。申しあげるまでもなく宗祖法然上人のお言葉であります。このこと
を、お寺にお集まりいただいた檀信徒の皆様にお伝えすることは当然として、あらゆる
機会にあらゆる場所で、そして檀信徒以外の方々にもお伝えできる、それが浄土宗僧侶
の理想であります。何よりも、伝え方ではないでしょうか。

浄土宗の「宗綱」では、教旨を「阿弥陀仏に帰命し、その本願を信じ、称名念仏によ
って、その浄土への往生を期す」とあり、本宗の目的は、「法然上人の立教開宗の精神
に則り、本宗の教旨をひろめ、儀式を行い、僧侶、檀信徒その他の者を教化育成し、本
宗を護持発展させることにより、世界平和と人類の福祉に寄与する」ということであり
ます。

使命と目的をしっかりと持って、教えを正しく伝えるには、伝える本人（僧侶）がいかにあるべきなのか、を考えたいと思っております。浄土宗教師になるためには相應の修行があり、伝宗伝戒道場を成満しなければなりません。加行を受け猊下より伝法をいただいて僧侶になるわけですが、それで良いということではないのです。僧侶としての教養を高め、儀式を行う技術を身につけることは当然ですが、それらを務めることだけが「人徳の高さ」ということにはなりません。

世間一般の人々が僧侶に接する場合、先述したようにいきなり法話を聴いてくれるわけではなく、まず親の法事を勤めたい、或いは不幸にも身内が亡くなってお葬式を執り行つてほしいといったことが多いと思います。常日頃から接している檀信徒・信徒関係がある場合は問題ないのですが、そうでない場合もありますし、その方が多いかもしれません。

特に世間の人々が不満に思っていることは、僧侶の経済的活動でありましょう。経済活動をしてはいけないということではなく、まずは先方の話を聴く、よく「傾聴」という言葉を聞きますが、まさにそれでしょう。特に自身に不幸があった人には、傾聴が大切です。悲しみを同じくし、優しく接したいものです。

全日本仏教会の会合等でもよく話題に出ることですが、やはり現代の僧侶にとって必

要なことは意識改革、資質向上ということであります。

自分たちが今置かれている状況を理解すること、どう見られているかを知ることです。そして資質向上です。宗教的知識はもとより、儀式を執り行う技術も磨かねばなりません。そして何よりも清貧さかもしれません。

自分を理解してもらい、相手を理解することが大切であります。くだいようですが常人の真似できない修行をすることや儀式を行う能力などありますが、まず自分自身が凡夫であることを知り、人々に接する心を持つこととあります。「浄土宗二十一世紀劈頭宣言」にある「愚者の自覚を」であります。

御歳九歳のとき「父の遺言忘れ難く」と仏門に入った若き日の法然上人が二十五年間の修行の後、辿り着かれた教えが、今私たち浄土宗僧侶のお伝えしなければならない教えなのであります。

法然上人がお示くださったみ教えを、自分自身深く信じ、そしてお伝えする僧侶を養成したい。弊職も一所懸命励んでまいりたいと考えております。

合掌

平成三十年四月

浄土宗宗務総長 豊岡 鐐尔

テーマ 「凡入報土（救われていく道）」

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり。

（『法然上人行状絵図』六）

私が浄土宗を立てた意趣は、凡夫が阿弥陀仏の報土に往生できることを示すためである。

（浄土宗総合研究所編『現代語訳 法然上人行状絵図』より）

法然上人のこのお言葉（心）が、我（法然上人）から我々（全浄土宗教師）に与えられたと認識したとき、全浄土宗教師の行動理念たるものと考えます。すなわち、「示さむ」という意志に基づく自行化他の行動、教化活動こそが浄土宗教師のつとめでありましょう。

平成三十六年に浄土宗開宗八五〇年を迎えます。本宗の布教方針は、約八百五十年前に法然上人が専修念仏の法を確信し、やがて世に布教されたように、開宗の教えである「ただひたすらに称名念仏を修する専修念仏」を伝えることにあり、その行動指針は「凡夫の報土に生まるることを示す」ことに尽き、法然上人のご法語を通じ、救われていく道を布教することとであります。

この布教方針は、『二十一世紀劈頭宣言』（愚者の自覚を・家庭にみ仏の光を・社会に慈しみを・世界に共生を）に活かされているとおりです。

浄土宗の理想とする教師像は、寺院にて、社会にて、人々の集うところで、さまざまな所で、さまざまな機会に、「立教開宗のこころ」を伝える人であります。

◎目次◎

はしがき	浄土宗宗務総長 豊岡鑑尔	2
------	--------------	---

布教方針		6
------	--	---

教諭	浄土門主 伊藤唯眞 猊下	11
----	--------------	----

教諭を拝して	浄土宗布教委員会委員 小林尚英	16
--------	-----------------	----

第1章 所求——極樂往生をめざして

「浄土三部経」に見る極樂の世界	佛教大学准教授 伊藤真宏	28
-----------------	--------------	----

第2章 宗祖のご法語をいただいて

一、願往生……………石山昭憲 58

二、死ぬまで元気、死んでも元気——永遠の生命と無限の向上——
……………土屋正道 72

三、栄えあるものも久しからず……………榎本了示 85

四、念仏の声 思いを託し結ぶ縁……………永目眞爾 99

* 凡 例 *

典拠を示すにあたっては次の略号を用いた。書名のあとの数字は、数および頁数を示す。

○聖典……『浄土宗聖典』（浄土宗）

○昭法全…『昭和新修法然上人全集』（平楽寺書店）

○浄全……『浄土宗全書』（山喜房仏書林）

○正蔵……『大正新脩大蔵経』

○御法語…『平成新版元祖大師御法語 前篇・後篇』（知恩院）

なお引用文は、漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは適宜、新字・現代仮名づかいにあらためた。

教 諭

宗祖法然上人には沢山のお言葉（ご法話）が残されていますが、中でも有名なご法語が『一枚起請文』と『二紙小消息』の二つであります。その『一紙小消息』の一節に

十方に浄土多けれど、西方を願うは、十悪五逆の衆生の生まるる故なり
と仰せであります。

東西南北四維上下に、数知れぬ多くのみ仏が、それぞれの国土（お浄土）を構えておられる中に、ひととき有名なお浄土が、西方にある阿弥陀如来さまの「極楽浄土」であります。今から十劫という遠い昔、永くきびしいご修行の結果、その酬いとして一切衆生のためにお建てくださったのが、この西方極楽浄土でありました。そのお浄土が、他の仏国土と異なるのは、十悪五逆ほどの大悪人でも、我が名を呼ぶ者は、必ず済み取るといふ阿弥陀ほとけの誓いが成就されて建てられた国土であるという点にあります。それを我々衆生の側から申せば「所求の土」（求めるところのお国）といたたくのであります。

実際のところ振り返って我が身を思う時、まことに恥ずかしい凡夫であることに愕然といたします。因縁ととのわず刑務所に行かないだけで、ものの生命を取る殺生罪をはじめ、はては五逆の大罪をも犯し兼ねない大悪人とは、私のことであると気付く時、お浄土の存在がまことに尊く、また身近に戴けるのであります。お経さまに、お浄土はへ十万億土の仏土を

過ぎた遙か向こう」とも説かれ、また「ここを去ること遠からず」とも説かれています。これは矛盾するようですが、どちらも正しいと思います。わが罪に気付かず、懺悔の念もなく、み仏のお慈悲をいただけない者にはお浄土は遠く、我が身の罪障におののき、み仏のご本願の真実に目覚めた者には「去此不遠」の経文が素直に喜べるのです。まことにお浄土は「彈指」の一瞬、即得往生の益を蒙るのであります。西方極楽浄土への憧れは、やがて「阿弥陀浄土変相図」のような曼陀羅を画くようになります。中国の善導大師などもこの変相図を画くこと三百舗に及んだといわれており、日本でも有名な「當麻曼陀羅」や「智光曼陀羅」「清海曼陀羅」などが作られ、当時の人々のお浄土への想いが偲ばれます。

また西方浄土へのつよい憧れは「日想観」の修行でも知られます。法然上人も四天王寺西門の辺りでこの観法をされたと伝えられています。私たちは西空に真つ赤な、大きな太鼓のような夕日が沈んでゆく、その彼方に阿弥陀仏のお浄土を拝み、同信の肉親・縁者との「俱会一処」の歓びを実感するのであります。

愛宕山 入る陽のごとく あかあかと

燃やし尽くさん のこれるいのち

哲学者西田幾多郎博士のお歌でありますが、愛宕山に沈む夕日の向こうに自らの終焉の浄

刹を見定め、大いなる歓喜のうちに残るいのちを燃やし尽くそうとされたのではないでしようか。

吉水の流れを汲む我々は、お念仏の中で緇素おしなべて一蓮同生の益を蒙るのみならず、個人的な小我小欲を棄て、あかあかと燃える情熱をもって進んで全人類の幸福・全世界の大福祉の為に貢献しようという大誓願を持たねばなりません。その道こそ「四弘誓願」の菩薩道にも通じるものであり、浄土宗が二十一世紀劈頭に宣言した「社会に慈しみを 世界に共生を」という精神に外ならないのであります。

合 掌

平成三十年一月一日

浄土門主 願譽唯眞

教諭を拝して

教諭を拝して

浄土宗布教委員会委員 小林 尚英

平成三十年度の布教方針は「凡入報土（救われていく道）であり、副題として「所求・所帰・去行―所求・極楽往生を目指して―（二）」であります。この所求・所帰・去行について良忠上人は『決疑鈔』二では、

謂く西方の行人、極楽を以て所求と為し、弥陀を以て所帰と為して……⁽¹⁾。

また『浄土宗大辞典』では、

浄土宗の信仰や教行における三要素で、目的（所求）と対象（所帰）と実践（去行）のこと。所求（信仰の目的）は往生浄土、所帰（信仰の対象）は阿弥陀仏、去行（信仰の

実践）は本願念仏である。⁽²⁾

と解説し、やはり極樂を所求としています。

そこで極樂浄土について、經典ではどのようにみていたかであります。『阿弥陀経』では、

これより西方、十万億の仏土を過ぎて、世界あり。名づけて極樂という。その土に仏まします。阿弥陀と号したてまつる。今現にましまして説法したもう。⁽³⁾

といって「極樂」と名づけています。また『無量寿経』は、

法蔵菩薩、今すでに成仏して、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界を名づけて安樂という。⁽⁴⁾

とあるように、「安樂」としています。いずれも極樂とは、阿弥陀仏という仏の住する世界、もしくは仏国土の名称であって、中国、日本では極樂浄土といっています。

また『観無量寿経』（以下『観経』）では「阿弥陀仏、ここを去ること遠からず⁽⁵⁾」としています。この『阿弥陀経』『無量寿経』の文と『観経』の文との相違について、「教諭」では、懺悔の念もなく、み仏のお慈悲をいただけない者には遠く、我が身の罪障におののき、み仏のご本願の真実に目覚めた者には「去此不遠」とされています。

次に「教諭」では『一枚起請文』と『一紙小消息』の二つを重要視しております⁽⁶⁾。なかでも「十方に浄土おおけれど、西方を願うは十悪五逆の衆生も生まるる故なり」という文に注目されています。ここでいう西方極楽浄土への往生を願うのは、十悪五逆の大罪を犯した衆生が生まれるからとする根拠の文をさぐると、それは善導大師の『観経疏』のなかで、

問うて曰く、かの土および土、すでに報なりと言わば、報法は高妙にして、小聖すら階り難し。垢障^{くしょう}の凡夫^{いふ}云何^{いかな}が入ることを得ん。答えて曰く、もし衆生の垢障を論ぜば、実に欣趣^{こんしゅ}し難し。正しく仏願に託して、以て強縁^{じやうえん}とするに由つて、五乗をして齊しく入らしむることを致す⁽⁷⁾。

の文であることがわかります。善導大師はここで、五乗（人・天・声聞・縁覚・菩薩）の者

でも、阿弥陀仏の本願力によって報土往生が許されるとしています。法然上人が「凡入報土」とする根拠はまさにこの文によっていることです。

次に法然上人の『選択集』の文を今一度みていきますと、

まさに知るべし。一一の願虚しく設くべからず。故に善導の云く、「彼の仏今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得」⁽⁸⁾

とあります。ここで注目すべきは、「まさに知るべし」とか「衆生称念すれば必ず往生を得」という文であります。私共は、この文を単に平面的に読むのではなく、主体的にあるいはより実践的に捉えなくてはなりません。そうでなければ真に往生浄土は理解できないと思われるます。この文を深く受け止め、それを自己の念仏生活の中により深く生かしていくことが大切であります。さらにもう一つ、

ただ能く上百年を尽し、弥陀の名号を念ずれば、定んで往生を得ること、必ず疑い無き

なり。⁽⁹⁾

の文が挙げられます。ここでも、仏の名を称すれば必ず浄土に往生することができるとしており、前文と同様に深く受け止め、そして自己の念仏生活をより充実させることが大切であります。

別の角度からみていきますと、当然ながらこの所求とは、私共が死後に往生する世界、極楽浄土を意味します。この所求である極楽浄土について法然上人は、臨終の床にあって、

我、元極楽に在りし身なれば、定めて帰りに行くべし。⁽¹⁰⁾

といい、また善導大師も『観経疏』定善義の結びで、

帰りになん去来、^{いぎ}極楽は身を安ずるに、実にこれ精なり。正念の西に帰って華含むと想え⁽¹¹⁾

と述べていますが、このような視点に立つならば、西方極楽世界に迎えられ往生することは、

仮の宿であるこの世の凡夫が、真実の家郷にかえることを望み求めることであります。

そこで仮の宿であるこの世ということについて少しく考えてみたいと思います。

地方では葬儀のおり、野辺のべの送りが行われていますが、そのとき「六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六種の世界）廻り」があり、阿弥陀堂等の御堂の前に四門の幡を立てて、そこに『涅槃経』に説かれる、

諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂⁽¹²⁾

という偈文（雪山偈）を掲げます。これは、

もろもろのつくられたものは無常である。生じては滅びる性質のものであり、生じては滅びる。それらの静まることが安樂である。

という意味であります。「いろは歌」はこの四句を詠んだもので、

色は匂へど散りぬるを（諸行無常）、わが世たれそ常ならむ（是生滅法）、有為の奥山け
ふ越えて（生滅滅已）、浅き夢みじゑひもせず（寂滅為樂）。

ということです。

この四門の幡の周りを四々六回、僧侶、遺骨を持った喪主、遺族等が廻ります。これは昔から行われてきた葬送儀礼でありまして、亡きみたまが六道の世界から離れて極楽浄土に往生してほしいという願いをこめて四々六回廻るのです。仏教でいう六道輪廻生死解脱ということです。ただこのような行事が年々生滅していることは残念でなりません。

そこで法然上人が生死輪廻解脱についてどのように解釈されているかを見ていきたいと思
います。『選択集』第一六章段に、

それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且らく聖道門を閑きて、選ん
で浄土門に入れ。…（中略）…正定の業とは、すなわちこれ仏名を称するなり。名を称
すれば、必ず生ずることを得。仏の本願に依るが故なり。⁽¹³⁾

といって、すべての人びとが、苦悩に満ちた迷いの世界から脱れ出ようと思うなら、仏道を大きく二種に分かつ中、末法の我々は、まずもって悟りへの道（聖道門）はさしおいて、選んで浄土の救いの道（浄土門）に入らねばならないとしています。そして「正しく仏の選定された行業（正定業）」とは、すなわち阿弥陀仏（所帰）のみ名をとなえることであります。み名をとなえれば（去行）必ず極樂浄土（所求）に往生することができます。それは阿弥陀仏（所帰）の本願に誓われているからであり、現に救いの力がはたらくからであります。要するに、ここである「生死を離れる道」とは本願である念仏（去行）をとなえることであると結論づけ、阿弥陀仏（所帰）のみ名をとなえれば（去行）、必ず極樂浄土（所求）へ生まれることができるとしているのです。

法然上人の場合、生死輪廻解脱の法はただ一つ、それは極樂に往生することであるとし、もし極樂に往生しなければ、生死輪廻解脱することができないとしています。そして、極樂に往生する行として称名念仏を挙げており、その理由として本願であるからだとしています。基本的には、極樂に往生しなければ生死を離れることはできないし、念仏の行でなければ極樂に往生することができないとしています。この点については、法然上人の、

一途に極樂を願ひ、一途に念仏して、この度必ず生死を離れんと思し召すべきなり。⁽¹⁴⁾

とっている文で、ここでは生きているこの世において、今度こそ生死の迷いを離れて、死後極樂浄土に生まれなさいというのであります。法然上人語録のなかには、生死を離れる道として、本願の念仏によるとも、しかも「今生において」という表現が再三使われており、いかに当時において六道輪廻の思想が強くでていることが伺われます。われら罪惡生死の凡夫は曠劫（きわめて長い時間）より生死輪廻を繰り返してきたが、今生にこそ生死輪廻の世界から離れて極樂世界に往生しなさい、というのです。

最後に「教諭」のなかで、

西方極樂浄土への憧れは、やがて「阿弥陀浄土変相図」のような曼陀羅を画くようになります。中国の善導大師などもこの変相図を画くこと三百舗に及んだといわれており、日本でも有名な「當問曼陀羅」や「智光曼陀羅」「清海曼陀羅」などが作られ、当時の人々のお浄土への想いが偲ばれます。

「智光曼陀羅」「当麻曼陀羅」「清海曼陀羅」は「浄土三曼陀羅」と呼ばれ、そのうち「当麻曼陀羅」と「清海曼陀羅」は『観経』の所説に基づいて描かれたものです。善導大師は西方浄土変相図を三百幅作ったといわれ、『観念法門』に、

若し人有て観経等に依て浄土莊嚴の変を画造して、日夜に宝地を観想すれば、現生に念念に八十億劫生死の罪を除滅す。⁽¹⁵⁾

といって、曼陀羅の作成を述べています。曼陀羅を描かれたいうことは、浄土の經典に基づいて極楽の様相を具体的に絵にし、広く浄土教信奉者により理解してもらいたかったものと思われれます。つまり具体的に極楽浄土はこのような世界であると示したもので、この浄土三曼荼羅は後世多くの寺院に模写されたものが残されている。

平成三十六年には浄土宗開宗八百五十年を迎えます。全浄土宗教師の行動指針は「凡夫報土に生まるることを示す」ことに尽き、我々は法然上人のご法語を通じ、救われていく道を布教することであります。

【註】

- (1) 『浄全』七・二二二頁・上
- (2) 『浄土宗大辞典』八四一頁
- (3) 『聖典』一・三一六頁
- (4) 『聖典』一・二三六頁
- (5) 『聖典』一・二九一頁
- (6) 『聖典』四・四二一頁
- (7) 『聖典』二・一八五～一八六頁
- (8) 『聖典』三・一二一～一二二頁
- (9) 『聖典』三・一四五頁
- (10) 『聖典』六・五八二頁
- (11) 『聖典』二・二八四頁
- (12) 『正蔵』一・二〇四頁・下
- (13) 『聖典』三・一八五頁
- (14) 『聖典』六・三七七頁
- (15) 『浄全』四・二二八頁

◎
第1章
◎

所求

——
極樂往生をめざして

「浄土三部経」に見る極楽の世界

佛敎大学准敎授 伊藤 真宏

1 はじめに

「所求——極楽往生を目指して」は、我々浄土宗敎師にとって、最重要のテーマといつてよいでしょう。なぜなら極楽浄土に往生することが何よりも大切な目的であるからです。極楽浄土については、すでに昨年度、曾根宣雄先生が必要かつ十分に説き明かされました。本稿では、その極楽浄土に、なぜ往生するのか、つまり極楽浄土を目指す意義について、「浄土三部経」や法然上人のお言葉などから探り、所求という信仰目的をしっかりと掴んでみたいと思います。

筆者はたびたび、「なぜ往生しなければならないのか」という質問を受けることがあります。筆者の印象では、そのような質問をされる方は、概ね、念仏すれば極楽に往生できる、

ということについては理解しておられ、しかもどうやら、阿弥陀仏が来迎してくださることを有り難いな、とも思っておられるのです。にもかかわらず、「往生しなければならない」ことに引かかるようです。本稿がその答えとなることを願っています。

2 所求とは

「所求」という言葉自体は、法語をひもといても、法然上人が使用された形跡はありませんが、善導大師や良忠上人は頻繁に使用されます。使用状況は、『新纂浄土宗大辞典』に詳しいのでご参照ください。

所求とは、信仰の三要素、「目的・対象・実践」の「目的」に当たり、往生極樂のことを言います。周知のことですが、目的Ⅱ所求、対象Ⅱ所歸、実践Ⅱ去行であり、つまり浄土宗の信仰とは、極樂往生を求め、阿弥陀仏に歸依し、念仏を行ずることにつきます。

極樂浄土は阿弥陀仏が建立した理想世界であって、その様子は「浄土三部經」に詳述されます。特に『無量寿經』には、法蔵菩薩が誓願を建て、それらが成就されたことで現出した

「安楽」Ⅱ極楽浄土について具体的に示されています。⁽¹⁾

またその国土には、七宝の諸樹・金樹こんじゅ・銀樹ぎんじゅ・瑠璃樹るりじゅ・玻璃樹はりじゅ・珊瑚樹さんごじゅ・瑪瑙樹めのうじゅ・砮磈しゃこ樹じゅあり、あるいは二宝三宝乃至七宝、転共に合成せるあり。あるいは銀樹の、金葉華果こんようけかなるあり、玻璃を葉とし、華果またしかなり。あるいは水精樹あり、瑠璃を葉とし、華果またしかなり、あるいは珊瑚樹あり、瑪瑙を葉とし、華果またしかなり。

（『聖典』一・二三九頁。以下、『無量寿経』上巻の最後まで極楽浄土について詳説されるが、省略）

〈樹〉

極楽には、金、銀、瑠璃るり、玻璃はり（水晶）、珊瑚さんご、瑪瑙めのう、砮磈しゃこという、それぞれの宝でできた樹が全土に満ちており、二つの宝あるいは、三つ、果ては七つの宝が組み合わさった樹まで様々な組み合わせがあります。なんと豪華できらびやかなのでしょうか。金の樹には銀の葉や花が咲き銀の果実が成っていますし、銀の樹には金の葉や花、果実が、瑠璃の樹には水晶の葉や花、果実が成り、水晶の樹には瑠璃の葉や花、果実が成り、珊瑚の樹には瑪瑙

の葉や花、果実が成り、というように、様々に組み合わせられた樹々が極楽を彩っているというのです。

また、幹が紫金で茎が白銀、枝が瑠璃や水晶、葉っぱが珊瑚、瑪瑙の花が咲き碑礫の実が成る宝の樹があり、それら七宝の組み合わせが異なる様々な宝の樹が多くあります。さらにこれらの宝樹は整然と並び、茎も枝も葉も花も実もすべて一糸乱れぬ様をなし、目映く輝いていて、爽やかな風が吹くと、そこから五つの調和のとれた見事な音を奏でるのです。見た目にもきれいばかりでなくその、音を聞くと心和らぐことでしょう。

さらに、阿弥陀仏がさとりを開かれた菩提樹は、大変巨大であり、すべての宝でできおり、「宝の中の王」と呼ばれる宝で飾られています。枝から宝の飾りが垂れ下がり百千万色に変化し光り輝き、宝の網がそれを覆い、ふさわしいところにふさわしい装飾が現れます。そこへわずかな風が吹くと、枝や葉が限らない真理の音を出し、どこへでも広がってあらゆる仏の国に行きわたり、その音を聞いたものは深法忍を得て、退くことがないといえます。それからさとりを得るまで耳が清らかになり苦を生ずるようなことは聞かず、目にその樹を見、耳にその音を聞き、鼻でその香りを知り、舌で味わい、体にその光を浴び、心に樹のことを思うことで、誰もが深法忍を得られ退かない位に達し、さとりを開くまで六根は清らか

で悪い悩むことがあります。

〈建物、池〉

講堂、精舎、宮殿、樓閣といった建物もすべて七宝で飾り立てられ、阿弥陀仏の成道とともに自ずから現れていて、真珠など多くの宝で飾られた幕がそれらを覆っています。その内外や左右に沐浴のための池がたくさんあります。大きさはまちまちですが、長さや深さなどどれも同じです。池の中に八つの功德の水が湛えられており、清らかで香り高く甘露のように甘いのです。黄金の池には白銀の砂、白銀の池には黄金の砂、水晶の池には瑠璃の砂、瑠璃の池には水晶の砂、珊瑚の池には琥珀の砂、琥珀の池には珊瑚の砂、硨磲の池には瑠璃の砂、瑠璃の池には硨磲の砂、白玉の池には紫金の砂、紫の池には白玉の砂が、それぞれ底に敷かれ、その上、二つの宝が混じり合った池や、三つの宝、四つの宝等、七宝まで混じり合った池があります。池の岸には香り高い梅檀せんだんの樹が茂り、様々な光の花や葉が池を覆っています。

〈沐浴〉

池に入つて、足を水に浸したいと望めば、すぐに水が足を浸し、膝まで欲しいと思えば、すぐに水は膝まで来ます。腰まで欲しいと思えば、すぐに水が腰まで浸し、頸まで欲しいと思えば、水はすぐに頸まで来ます。体に水を灌いでほしいと思つたら、自然に水が体に灌がれます。元に戻つてほしいと思えば、水はすぐに元に戻ります。温度調節も思いのままです。ですからそこで沐浴すると、心が開放され、からだは悦び、煩惱が取り払われます。水は清く澄んでいて何も無いように透明であり、底の宝の砂は、よく光を放つて深くても光が届かないことはありません。

〈波の音〉

ゆつたりと引き起こしつづける波は、ゆるやかで遅くも速くも起こり続ける波が、すばらしい音を出します。それは誰にも、その音は、仏を讃える声、法を讃える声、僧を讃える声にも聞こえます。また、涅槃ねはんじやくじょう寂静じやくじやうや、空無くうむ我の教がえ、大慈悲の心、波羅蜜はらみつの修行等々の声にも聞こえ、その声を聞くと心は悦びに満たされ、それによつて、清浄にして離欲、寂滅、真実等が身に具わります。地獄、餓鬼、畜生の苦難がなく、快樂の音だけがあるので、

「安楽」国というのです。

〈食べ物〉

極楽に往生したものは、姿形が清らかであり、すばらしい声であって、神通力や様々な功德が具わっています。住んでいる宮殿や衣服、食べ物、飲み物、花やお香、装飾品等は、まるで、欲望がすべて実現する世界に普通にあるもののようです。何か食べたいと思えば、たくさんのおいしい食べ物、飲み物で満たされた器が現れます。食べ物はそこにあるけれども、実際に食べるものはおらず、それを見、匂いをかぎ、心に「食事をした」と思えば、自然に満足して身も心も穏やかになり、食べ物に執着することがありません。満足すると食べ物は自然に消え去り、時間が来たらまた現れます。

これらのように、私たちがこの世で「夢のよう」に思う理想的な描写が繰り広げられています。絢爛豪華な、光と音により彩られた空間。壮大な自然と、あらゆるものが調和する世界。沐浴の水の量や温度が思いのままになり、さざ波の音が心身に悦楽をもたらせ、衣食住において快楽を実現し、殊に飲食においては、あふれるごちそうが現れて、しかも実際に食

べずとも満足できる、というのです。

まだ他にも極樂の勝相が述べられます。

その諸もろの声聞・菩薩・天・人、智慧高明の神通洞達し、咸同じく一類にして、形異状なし。ただ余方に因順するが故に、天・人の名あり。顏貌端正にして、世を超えて希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、皆自然虚無の身、無極の体を受く。

〔聖典〕一・二四四頁

極樂にいる声聞や菩薩や天人や人々は、智慧が優れていて神通力を具え、同じ容貌であつて、姿形が異ならないといい、顔だちが端整で、容姿端麗な様は天上界にも人間界にも類を見ず、その身体はあるがままで実体がなく、さとりを体現した身体を受けている、と説明しています。また、

無量寿国の、その諸もろの天人、衣服・飲食・華香・瓔珞・繪盃・幢幡・微妙の音声・所居の舍宅・宮殿樓閣、その形式に称つて、高下大小あり。あるいは一宝二宝乃至無量

の衆宝、意の所欲に随い、念に応じてすなわち至る。また衆宝の妙衣をもつてあまねくその地に布けり。一切の天人、これを踐んで行く。無量の宝綱、佛土に弥覆せり。皆金縷真珠、百千の雑宝、奇妙珍異なるをもつて、莊嚴交飾せり。四面に周巾しゅうしんして、垂るるに宝鈴をもつてす。光色晃耀して、尽く嚴麗を極めたり。自然の徳風、徐く起つて微動するに、その風調和にして、寒からず、暑からず。温涼柔軟にして、遅からず、疾からず。諸もろの羅網および衆もろの宝樹を吹いて、無量の微妙の法音を演発し、万種の温雅おんがの徳香を流布す。その聞くことある者は、塵勞垢習じんろうくしゅう、自然に起らず。風、その身に触るるに、皆、快樂を得。譬えば比丘の、滅尽三昧めつじんさんまいを得るがごとし。

『聖典』一・二四六頁

とあり、極楽にいる天人や人々の衣服、飲食、花やお香、裝飾品、天蓋や幢幡、すばらしい音、住まいや宮殿、樓閣は、それぞれの人のとつて形や色が程よく、高い低いや大小などがあつて、思うままにいくつもの宝で作られています。また宝でできたすばらしい布が地面に敷かれていて、天人や人々はその上を歩きます。宝でできた網が極楽を覆い、その網は金の糸や真珠、珍しい多くの宝で飾り立てられ、網目からは宝の鈴が垂れ下がって麗しく輝いて

います。功德の風が少し吹くと、その風は和らいでいて寒くなく暑くなく、弱くもなく強くもなく、その風が網や樹に吹きかかると、仏の教えを表す計り知れないすばらしい音を発し、あらゆる徳の香りを運んできます。その音を聞き匂いをかくものは煩惱が起こらず、その風が身体に触れれば誰もが快樂になります。それは修行者が三昧に入った時に得られる法悦と同じ心地だということです。

さらに次のようにも述べます。

また衆宝の蓮華、世界に周満しゅうまんせり。一一の宝華に、百千億の葉あり。その華の光明、無量種いようしゅかんの色あり。青色には青光あり。白色には白光あり。玄黄朱紫げんのうしゅしの光色もまたしかなり。暉暉いようかん煥爛くわんらんにして、明曜なること日月のごとし。一一の華の中より、三十六百千億の佛を出だす。一一の光の中より、三十六百千億の佛を出だす。身色紫金しんしきしこんにして、相好殊特そうこうしゅとくなり。一一の諸佛また百千の光明を放って、普く十方の為に、微妙の法を説きたまう。かくのごときの諸佛、各おの無量の衆生を、佛の正道に安立あんりちうせしめたまう。

〔聖典〕一・二四七頁

極楽には宝でできた蓮華があらゆる所にあり、一つの蓮華に百千億という葉があり、華から放たれる光は計り知れず、様々な色の光があつて、太陽や月よりも明るく輝いています。一つの華からたくさんさんの光が出て、その一つ一つの光からたくさんさんの仏が出てきます。その仏は紫金で勝れた姿をしていて、一つ一つの仏から百千という光明が放たれて勝れた法を説き、衆生をさとりに導くのです。

『観無量寿経』には、極楽を観想する十六の観法が説き明かされ、そこに極楽の詳細な様子が述べられます。その情景は『當麻曼陀羅』で可視化されています。

『阿弥陀経』には、『無量寿経』や『観無量寿経』に説かれる内容をまとめるように、簡潔に極楽の様が描かれています。極楽にいる人は苦を受けず、楽ばかりを得、七重の欄干や網や並木があり、それらは宝で散りばめられていること。七宝の池があり、八功德の水が湛えていること。池の底は黄金であり、大きな、青・黄・赤・白の蓮華が咲き、それぞれの光を放っていること、その周りの階段、楼閣は宝で飾り立てられていること、音楽が鳴り、昼夜六時に曼陀羅華^{まんだらけ}が降り、人々はその花を仏に供養すること、種々の珍しい鳥がいて鳴き、その声が法を教え、心地よい風が宝樹や網から音を立て、それを聞くものには仏・法・僧を念じる心が生じること、極楽の人々は不退転であること、等々が述べられ、「浄土三部経」に

は共通して、勝れた様子が説き明かされています

要するに、極楽というところは、どのような欲望もすべて叶えられる場であり、あらゆる欲望に対してすべて満足できるので、反対に執着することが一切なく、よって心乱されることもなく、心身ともに完全な理想的な状態となるので、さとりへ方向づけられるということになります。

気付かされるのは、この世の価値観をはるかに凌駕する様子で彩られておることでしょう。視覚や聴覚という五感に訴え、感覚的に理解されるよう、言葉を尽くして説明されています。如何に阿弥陀仏の極楽浄土が素晴しいか、娑婆世界で様々な悩み苦しむ衆生に対して釈尊が、衆生の理解できる最大の価値観をもって、言葉を尽くして説明して下さっているです。

3 往生とは

「往生」という用語は、読んで字のごとく「往く」と「生まれる」ということです。周知のごとく、法然上人は「生けらば念仏の功つもり、死なば浄土に参りなん」と述べられ、

「生きているうちは念仏し、死んだら浄土に往生すること」を期されています。

つまり、往生するということについて、往生とは、「この世を終えて極楽浄土に生じること」と理解されます。字面では理解できても、それを現代人にどのように説明するか、を課題にされている方も多いかと存じます。しかし「現代人にどのように説明するか」というのは、結論から申せば、「智者の振る舞い」です。自分は理解しているが、科学的知見が一般化している現代人には阿弥陀仏の極楽浄土に往生する、ということが理解し難いであろうから、何とかうまく説明できないだろうか、ということでしょう。あるいは、自分も信じられない「往生」について、現代人である自分も、そして他人にも、うまく納得させる説明はないのだろうか、ということかもしれません。そこで、自分の狭い知識に頼って「往生」を説明しようとしても、それは狭い自分の世界観や価値観からの説明に過ぎず、例えば自分が何とか納得できる内容であっても、誰かを納得させるには至りません。仮に、自分も他人も納得する説明ができるとすれば、きつと、さとりとは何か、仏とは何か、ということも説明が可能となり、煩惱も断ち切ることができるでしょうから、そのような智者であるならば、念仏は必要です。

仏教においてさとりに向かう方法はすでに提示され、私たちは、その提示に従って煩惱を

断ち、真理に向かえば良いのだけれども、現実の私たちは、貪ることを止められず、怒りに振り回され、妬んだり迷ったりするのです。それを自覚すれば、私たちが「往生」を何かに言い換えようとしても無理が生じるということに気づくべきです。その実情を直視すべきではないでしょうか。

「浄土三部経」の説示をそのまま受け止めて、「智者の振る舞い」をせず「ただ一向に念佛」せよとのお示しの意義がここにあるといえましょう。

そこで法然上人の法語に目を向けますと、やはり、三部経に説かれる内容によって「往生」を理解されていることが分かります。『往生要集大綱』で次のように説明されます。

往生というは捨此住彼蓮華化生なり。草庵に目を瞑するの間、便ちこれ蓮台に跌らち結ぶ時なり。衆の後に従いて一念の頃に生することを得。故に西方極樂世界と言う也。

〔浄全〕九・三七三頁⁽²⁾

往生とは、ここ、娑婆を捨て、極樂浄土に往き、蓮華に生ずることであり、家でも病院でも、最期臨終の目を閉じる時であり、それはつまり来迎した蓮台に座る時であり、同時に来

迎した極樂の聖衆の後につき従い、わずかな時間で西方極樂淨土に生ずる、と説明されています。これは、『無量壽經』で、

佛、阿難に告げたまわく。十方世界の諸天人民、それ至心あつて、かの国に生ぜんと願ずるに、凡そ三輩さんはいあり。その上輩じやうはいの者は、家を捨て欲を棄てて、沙門しゃもんとなり、菩提心を發し、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸もろの功徳を修して、かの国に生ぜんと願す。これ等の衆生、壽終じゆしゆうの時に臨んで、無量壽佛、諸もろの大衆と与に、その人の前に現じたまう。すなわちかの佛に随つて、その国に往生し、すなわち七宝華の中において、自然と化生す。不退転に住して、智慧勇猛ちえゆうみゆう、神通自在なり。この故阿南、それ衆生あつて、今世において、無量壽佛を見たてまつらんと欲せば、まさに無上菩提の心を發して、功徳を修行してかの国に生ぜんと願ずべし。

〔聖典〕一・二四九〜二五〇頁

とあり、「一向にもつぱら無量壽佛を念じ、もろもろの功徳を修してかの国に生れんと願ぜん。これらの衆生、壽終らんとときに臨んで、無量壽佛は、もろもろの大衆とともにその人の前に現れたまふ。すなはち七宝の華のなかより自然に化生して不退転に住せん」に依つてい

るのは明らかです。

また三祖良忠は、『往生礼讃私記』の中で「往」と「生」を説明して、

往は謂く、捨此往生は謂く蓮華化生なり。故に法華に即ち安樂世界の阿弥陀仏の大菩薩衆圍繞住處に往き、蓮華の中の宝座に住す。
(『淨全』四・三七七頁)

と言ひ、『法華經』の一節を引用しています。⁽³⁾ それによれば、「往」は、安樂世界の阿弥陀仏と、阿弥陀仏を取り巻く菩薩方が住まわれる所に往くこと、「生」は、蓮華の中の宝座に生ずることといい、いずれにしても、往生とは、この娑婆世界の命が終わって後、蓮台に乗り、來迎の聖衆に付き従つて極樂淨土の蓮の中に生じること、これに尽きると言えましょう。法然上人は、これ以外に往生を説明することはありません。

私たちは三界六道を生死輪廻する煩惱具足の凡夫であつて、そこから抜け出る縁が全くなかつた存在です。人の身に生まれ、仏教に出会い、苦からの脱却の方法を提示されており、その釈尊の提示に従つて、それを実践すれば、解脱できるのです。戒を守りつつ、心を落ち着けて冥想すること、それまで煩惱に遮られて見えなかつた真理眞実を洞察することがで

きる、そういう道筋が付けられているにもかかわらず、自己に執着し、煩惱に振り回され、娑婆世界において苦悩する存在です。外に向けては人を妬んだり恨んだり羨ましがったりし、内に向かっては自己に甘く自分で決めたことも守れない、そういった私たちは、いくらさとりを目指し修行しようと思っても、あらゆることに遮られている存在なのです。

所詮、私たちは、この娑婆世界において、自分に執われ、周りに執われ、さとりに向かうことのできない存在です。そして、それに気づけば、往生するしか救われる道がない、だからこそ往生することが必要なのです。釈尊の在世であれば、釈尊が対機説法によって、私自身に相応しい説法でさとりを導いてくださったことでしょうが、この世を去ってすでに二千年、五百年、釈尊の導きは經典に述べられているとは言え、それを理解することにとぼしい私たちは、往生することこそ、救われる唯一の道なのです。

「往生」と言うことが、この世を去り、阿弥陀仏の極楽浄土に生ずることと言っても、それが現代の私たちに容易に信じられない絵空事のようにも感じ、受け入れ難いことであるから、現代人にも理解できる分かり易い説明ができないだろうか、と考えていませんか。

あるいは、「法蔵説話」という言葉が誤解され、あたかも法蔵菩薩が四十八誓願を建て、成就して阿弥陀仏に成ったことを神話と捉えて、その真意を読み解くことが僧侶の役割と思っ

ていませんか。もし、浄土三部経に描かれていることを現代の人々に理解できるように読み替えようなどと模索することが、浄土教思想の研究や勉強であると考えているならば、大きな誤りです。今こそ、「智者」であるという傲慢さを捨てて、浄土三部経に説き明かされることをそのまま受け入れて実践すること、即ち極楽浄土に往生したいと思い尽くすことが僧侶の役割、と理解しましょう。

4 「いい」と「かしこ」

前章で記したように、「捨此往彼」は、「ここ」を捨て「かしこ」に往くことを意味します。「ここ」とは私たちのいるこの娑婆世界です。「かしこ」とは阿弥陀仏のおられる西方極楽浄土です。釈尊は「ここ」でさとりを開き、その方法を私たちに伝えてくださっているのですが、その釈尊がこの世を去り、私たちはさとりを開く能力が劣化し、自らの執着にさいなまれて、さとりに近づくことができない存在です。「ここ」ではさとりに近づくことが許されない、そういう衆生を救済するために、阿弥陀仏が極楽浄土を建立されたのであり、「かし

こ」は、煩惱にまみれ自分への執着が止められない凡夫が、「そこになら往きたい」と思うような事柄が散りばめられていると言えましょう。

そこに迎え入れられることで、さとした阿弥陀仏が直接説法している姿に接することができるのであり、またこちらの意図にかかわらず、極楽浄土で見聞きする一切の事柄が、さとりに向かわせるのです。なぜなら、極楽浄土の有様はすべて、法蔵菩薩が阿弥陀仏となったことによって出現しているものであり、風が吹いて木々の葉っぱが擦れ合う音が阿弥陀仏の説法であり、極楽の鳥が鳴く声はさとの内容として聞こえるのです。

「ここ」では、たとえ戒を守ろうと心がけたとしても、人を殺しはしないけれど、盗みなどほしないうまでも、酒を飲んで酔っ払うこともしばしば。自分の意志が弱いため、自分を守るために嘘をつくこともあるでしょう。職場の論理を優先して会社の利益を上げるために、粗悪な商品を販売することだってあるでしょう。正義を貫けば友人関係がギクシャクしたり、見て見ぬ振りをしなければ職場を離れざるを得ないということが現実にあります。「ここ」の現実を見据えれば、私たちがいかに努力して善なる方へ向うとしても、遭遇する出来事は悪へ悪へと導かれるばかりです。その自分自身が劣化して善なる方向さえも向けないわけですから、聖道門によっては絶望的である、ということなのです。

『逆修說法』五七日に、次の記述があります。

先ず依報とは、彼の仏の国中にあらゆる宝地^{ほうじ}、宝樹^{ほうじゆ}、宝池^{ほうち}、宝殿の地下地上の一切の莊嚴なり。其の宝地とは大經の中には「七宝^{しつぽう}為地^{いじ}」云々。觀經の中には「瑠璃^{るり}為地^{いじ}」云々。阿弥陀經の中には「黃金^{おうこん}為地^{いじ}」云々。三經、既に相違せり。何れを以ちて実義とすべきや。今、当座の御導師、私に意得候に、四義あり。先ず、実を以ち之を論ぜば、不可説無量の宝を以ちて極樂世界も地と為す。次に双卷經に「七宝池^{しつぽうい}為地^{いじ}」と説くことは、此の娑婆世界の習いは、金銀等の七宝を以て、殊勝の宝と為せり。故に、仏に、此の界の衆生の為に樂欲の心を起こさしめ、欣求の心を進めしめんと欲して、此の土の勝れたる宝を挙げて彼の国の地相と為る事を説き給えるなり。次に、觀經の中に「瑠璃^{るり}為地^{いじ}」というは、此の經は本より此の界の衆生の為に、觀想を勧めんと欲して説き給えるが故に、瑠璃は其の相、水に似たるに由りて、此の娑婆世界の水を以て觀の前方便と説き給えるなり。次に、阿弥陀經に「黃金^{おうこん}為地^{いじ}」と説きたまうは、彼の七宝の中には、亦、金を以て第一の宝とす、是れ、猶、詮を取りて最上の宝を挙げて、彼の国の地を踰わす。欣求の心を勧めんが為なり。

次に宝樹莊嚴とは、珍めき地ちなりと雖いえども、亦、樹なくんば、何を以てか莊嚴とすべし。此の娑婆世界に嚴じき勝地など申すも、樹木などの目出きをこそ申し候え。故に彼の国も此の土に准じて、宝樹の莊嚴をは説きたまうなり。其の宝樹高さ八千由旬なり。娑婆世界に何何にか左程に高き樹、候はん。円城樹こそ五百由旬とは申して候え。此の宝樹に就いて、純樹あり。純樹とは、専ら、金にしても銀にしても、唯、一宝を以て根より茎、枝、葉に至るまで、同じく金こがねにても銀しろがねにても在るをば、純樹と申し候。余の宝も、亦、尔しかなり。雜樹とは、或いは、根は金にて枝は銀なり。華け葉ようまでも、皆、別宝を以て交わりたるをば、雜樹とは候。

次に、宝池とは、設い樹ありとも池なくんば、尚、莊嚴なきが故に宝池の莊嚴をば説きたまえるなり。内外左右に諸の浴池ありと申して阿弥陀仏の浴池、八万四千由旬なり、云々。

次に、宝殿とは、設い宝樹宝池の目出たき莊嚴有りと、宝殿なくんば、阿弥陀も諸の聖衆も何にか居住したまうべき。故に宮殿を説くなり。樓閣とは宮殿の莊嚴なり。宮殿の四つの角に必ず在りと覚え候。

此等の依報は、皆、阿弥陀仏の功德なり。しかのみならず、自然の衣服あり。自然の飲

食あり。是れは行者に自力業因^{じりきごういん}に依りて得るに非ず。併しながら阿弥陀如来の願力なり。⁽⁴⁾

法然上人は、極楽浄土の大地である宝地について、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』でそれぞれに異なる説明がされていることを足掛かりに、その意義を読み解かれていまず。宝地を『無量寿経』では七宝とし、『観無量寿経』では瑠璃地であり、『阿弥陀経』では黄金とされていることについて、本来の極楽浄土の大地は、言葉では尽くせない宝でその地面を彩られるのだが、『無量寿経』で七宝というのは、娑婆世界で七宝が最高の優れた宝であるからとし、それが欲しいと思わせ、そこに往きたいという心を増進させるためだと述べられます。また『観無量寿経』で瑠璃地とするのは、『観無量寿経』が本来観想を想定した經典であり、瑠璃は水に似ているから、娑婆世界の、私たちに身近な水をまず思い浮かべることで、極楽の大地を観想しやすいうように瑠璃地としたのだ、と説明されます。『阿弥陀経』で宝地が黄金であるとするのは、七宝の中でも金が一番であるので、最上の宝で極楽浄土の大地を表現して、そこに往きたいという心を起こさせるためだと説明されます。

次に、宝樹が説かれるのは、大地が優れた姿を示していても、樹がなければ景色として素晴らしいとは言えないのであり、娑婆世界において素晴らしい景勝地には必ず樹木があるの

で、娑婆の我々が素晴らしいと感じる風景になぞらえて極楽の宝樹が説かれるのである、と述べられています。また宝池が説かれるのも同様に、たとえ樹木があっても池がないと景勝とは言えず、だから宝池が説かれる、といい、宮殿樓閣があるのは、阿弥陀仏や聖衆が住む場所だと述べられます。いずれも、娑婆世界の私たちが理解できる最高の価値観でちりばめられた世界が広がっていて、それは、私たちに「かしこ」に往きたい、と願わせるためのものである、ということなのです。

5 むすび

現実には娑婆世界に生きる私たちは、さとりに向かう方法を手に入れているにもかかわらず、それをまったく実践できず、その現実の中で、それでも自らに執着し、煩惱に苛まれ、苦の原因が自分のうちにあることを認められず、他人や何かに責任転嫁し、日々過ごしています。たとえ釈尊の示す聖道修行を実践しようと志してみても、娑婆世界のさまざまなことがそれを阻みます。

一方、極楽浄土は、娑婆に比べ何においても勝れた世界です。宝がちりばめられ、光に包まれた輝かしい空間であり、心地よい風とその風に宝の樹々の葉が音を奏で、それがさとりを示しています。さとした阿弥陀仏がおられ、直接説法が聞けます。そこにいる人に対して妬みを抱くこともなく、誰かと何かを比較して歎く必要もなく、私たちはただたださとりと導かれ行く、そんな世界が極楽浄土なのです。仏教を志すのに、これほど素晴らしい場所があるでしょうか。往生しなければさとることができない、だから極楽浄土を目指す、これが、往生するべき理由と言えましょう。

汚れている自分と、その自分を囲む汚れた社会は、私たちからさとりの世界を遠ざけています。そんな娑婆世界の現実を踏まえ、しっかり自分自身の有様を見つめ、極楽浄土を目指すことが、私たちにできる唯一の仏道の歩みなのです。

法然上人は『三部経釈』の、三心の説明の後で、

国土の快樂を聞きて誰か願わさらんや。
(『聖典』四・二九六頁)⁽⁵⁾

とおっしゃっています。極楽国土の「この娑婆世界とは比べ物にならない」心地よさを聞い

て、誰が「そこに往くことことを」願わないであろう、ということです。また善導大師は、『観経疏』散善義、深心釈の二種深信の説明の箇所で、

釈迦仏この『観経』の三福九品さんぷくくほん、定散二善を説いて、かの仏の依正二報を証讃して、人をして欣慕こんぼせしめたまうことを。また決定して深く信ず。『弥陀経』の中に、十方恒沙の諸仏一切の凡夫決定して生ずることを得ることを証勸したまうことを。

（『聖典』二・二八九頁）

とし、釈尊が、『観無量寿経』で三福九品定散二善を説き、阿弥陀仏と極楽浄土を説き明かして、人に歎び慕わせようとした、といい、法然上人も『選択集』第八章でそれをそのまま引用されています。

法然上人と善導大師に導かれ、「浄土三部経」に説き明かされる釈尊の文言を理解して、「往け」と勧める釈尊と、「来い」と迎える阿弥陀仏の、私たちに向けられた無限の慈悲を一身にこうむり、真実から極楽浄土に往生したいと願うことが、所求の本質と言えましょう。最後に法然上人のお言葉を紹介しておきます。

沙彌道遍どうへんかたりていわく。故上人仰せられていわく「往生のためには念仏第一なり学問
すべからず。ただし、念仏往生を信せん程はこれを学すべし」と。

（「諸人伝説のことば」・『聖典』四・四八八頁）

これは道遍が語り継いだ法然上人のお言葉です。「往生のためには念仏が第一であり、学問は不必要。しかし、往生を信じられるまでは学びなさい」とお示しくださっています。「智者の振る舞いをせずして」とおっしゃっていることを、「勉強なんかせずとも、難しいことが分からなくとも、念仏すればよい」。と思っっているならば、誤解です。自分の狭い知識で勝手に解釈せず、極楽往生が信じられるまでは学び続けること、これが私たちに求められているのです。

【註】

(1) 『無量寿經』卷上の終盤部分。『聖典』一・二四六頁五行から二四七頁一二行に該当。現代語訳は『現代語訳』浄土三部經（浄土宗総合研究所編）七三頁十行から八五頁一四行を参照。

(2) 『漢語灯録』は流布本である義山校訂本と、義山校訂前の写本である古本とが存在する。古本は、京都の大谷大学と千葉の善照寺に所蔵され、いずれかがいずれかを書写したと見られる。古本と流布本では異同があり、流布本は義山がかなりの部分を、読者の理解に資する意図で校訂している。引用したものは便宜上『浄全』所収の流布本をしたが、「捨此往彼蓮華化生」は古本にない。古本の当該部分は、『古本漢語灯録』六の『往生要集釈』に「言往生者、草庵瞑目之間、便是蓮台結跏之程。即從弥陀仏後、在菩薩衆中、一念之頃得生西方極樂世界。故言往生也」となっている。つまり「捨此往彼蓮華化生」は義山が挿入した可能性が高い。しかし、聖光の『浄土宗要集』に「往生者は捨此往彼也」（『浄全』十・一七三頁）とあり、良忠の『往生礼讃私記』に「往謂捨此往彼生謂蓮華化生」（『浄全』四・三七七頁）とあって、『法華経』「薬王菩薩本事品」の一節を引用して「往

生」について説明している。よって、法然上人も「往生」をこのように説明している可能性は極めて高い。

(3) 当該記述は、『妙法蓮華經』六(『正藏』九・五四頁下)にある。

(4) 伊藤唯眞監修・眞柄和人訳註『逆修說法』(四季社)より抜粋。

(5) 同様の記述が、良忠著『浄土宗要集』(『東宗要』)にも見られ(『浄全』一一・九五頁下)、良忠が取材、記録していたものを了慧が『和語燈録』に記載したことは確実であり、『和語燈録』と『東宗要』にしか見られない法語ではあるが、法然上人がおっしゃった可能性は非常に高い。

【参考文献】

高橋弘次『法然浄土教の諸問題』山喜房仏書林

深貝慈孝『中国浄土教と浄土宗学の研究』思文閣出版

曾根宜雄『浄土三部經』に説かれる極楽浄土』(『佛教文化学会紀要』第26号・平成

29年11月 佛教文化学会刊)

袖山榮輝『鳳翔学叢』第13号(平成29年3月 平等院刊)

◎第2章◎

宗祖のご法語をいただいて

一、願往生

石山 昭憲

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く

「十方に浄土おおけれど 西方を願うは十惡五逆の衆生の生まるる故なり」と。

(十念)

(「一紙小消息」 Ⅱ 『浄土宗信徒日常勤行式』より)

皆さま、このお十夜によるこそ御参詣くださいました。私は北海道の真ん中辺り、旭川市のお隣りにある当麻町という所の農村地帯に位置する法隆寺より参らせていただきました。私どもの地域一帯は昔、真冬にはマイナス三十度にまで気温が下がることがあり、反対に真夏には最高気温がプラス三十度超えという、冬と夏との寒暖差が甚だ激しい所でございます。もっともここ数十年は、いわゆる温暖化の影響か冬の最低気温はマイナス二十度前後とはなっておりましたが、それでも冬の雪と冷え込みは大変厳しいものがございます。その一帯にある浄土宗の各お寺においても、冬が近づき寒くなりかけの十月から十一月にかけて、やはりこのお十夜の法要が毎年勤められております。

さてこの度ご縁をいただき、〇〇寺さまのお十夜法要においてお話しさせていただくに当たり「願往生」なる標題を掲げさせていただきました。文字通り「往生を願う」という事でございます。ではどこへ？ 阿弥さまの極楽浄土へ、どうやって？ 南無阿弥陀仏のお念仏をとる事によってであります。

その「願」というお言葉については、皆さま方には、日常のおつとめとしておなじみのお経本の最初に出て来る「香偈」に「願我身淨如香炉」「願我心如智慧火」とあり、また中ほどの「四誓偈」には「我建超世願」とございます。さらに「発願文」の「願弟子等」や

「総回向偈」の「願以此功德」、また「総願偈」もしくは「四弘誓願」等々、お経文の中には繰り返し「願」という文字が出てまいります。まさに字の如く「ねがい」ということにほかなりませんが、一般的には「……をお願いします」とか「願わくは……でありますように」といった使われ方をし、相手方に注意を促したり、自らの願望を託すというような言い方がほとんどではないでしょうか。先の「発願」とか「誓願」、あるいは「本願」など、なじみのある仏教語ではありませんが、普段そうそう使われたりする言葉ではないかと存じます。冒頭、讃題として拝読致しました元祖法然上人のご法語には、以下のように説かれております。

「十方に浄土おおけれど」、み仏の国土は数多くありますが、「西方を願うは」、西方の極楽浄土・阿弥陀さまのお浄土へ往生を願うという事は、「十悪五逆の衆生の生まるる故なり」、十悪や五逆罪という、ありとあらゆる罪科に染まるこの私が、お念仏をとなえる事によって阿弥陀さまのお浄土に生まれる、極楽浄土への往生が叶うからである、かく元祖さまはお示しになられたのです。

古来、お十夜を勤める功德として「不求自得の利益」ということが説かれております。自

ら何かを求めて計らうことなく、自然に得られるご利益があるということです。しかしこの私はいつも「ああしたい、こうもしたい」「あれが欲しい、これも欲しい」と右往左往するばかり……。

浄土三部経中『無量寿經』下巻の後半に、「心を正しく思いを正しくして、在家信者の守るべき八つの戒律たる八斎戒を守り、清浄の心をもつて一日一夜を過ごせば、無量寿国にあって百年の間、善をなすに勝る」と説き、「なぜなら彼の国は、はからいのない自然な世界であって、すべての人々がみな善行を積んで、ただ一本の髪の毛ほどの悪もないから」と説かれます。さらにこの経文は続けて、「この世において善を修すること十日十夜すれば、他の諸々の仏の国において千年の間、善を行うよりも勝っている云々」とまで示されます。先の文では、この世で一日一夜の善行を積むことにより仏の国での百年間の善行より勝り、更にこの世で十日十夜の善行を積むと仏の国での千年間の善行より勝る、このようにお経文に語られます。元祖さまは、「念仏は是れ大善根⁽¹⁾」また「勝善根なり」とお示しです。

室町時代の半ば、伊勢^{いせ}守貞^{せのかみ}国公という方が出家を志し、京都の天台宗真如堂に三日三晩籠られ不断念仏の行を積まれます。最終三日目の明け方に夢のお告げを得て、出家を思いと

どまります。果たしてその翌日、貞国公の兄貞経公が失脚隠居、思いも寄らず家督相続の運びとなった貞国公は先の三日三晩に続き七日七夜のお念仏行を重ね、もって思いも寄らぬ家督相続のご利益に対する御礼の証とされたといえます。京都の真如堂においては、この貞国公が勤められた、先の三日三夜、これに後の七日七夜のお念仏行を合わせ十日十夜となつて、これがお十夜の起源と伝えられています。

貞国公が後の七日七夜勤めた念仏行とは、『阿弥陀経』の中ほどに出てまいります「若一日 若二日……若七日」と、阿弥陀さまの名号を執持する、すなわち一心にお念仏をとこなること一日から乃至七日という、そのお経文の教えに符合するものでございます。

また後に、神奈川県鎌倉・大本山光明寺に勅許をもつてお十夜が伝えられ、今や全国の浄土宗のお寺にも広がり、十月から十一月にかけ十夜法要が勤められるに至りました。延べにすると、それこそ「十夜」どころではない日数が、勤められている計算となります。

私もかつて京都の真如堂に参詣し、また鎌倉の大本山光明寺のお十夜には毎年長きに亘り参詣させていただいております。この鎌倉光明寺のお十夜においては、お念仏の中に勇壮なる太鼓や鉦の音が絶え間なく山内中に響き渡り、また夜には「稚児の礼讃舞い」といい、お稚児さんが節の付いたお経文「南無至心帰命礼……」という御文を唱えつつ舞いをする、愛

らしくも優美な法要も勤められ、まさに朝から晩まで終日、伝統的な念仏法要であるお十夜が、毎年十月半ばに繰り広げられます。

「十夜鉦 たたかれ通し鳴り通し」

さてこの「願往生」というおことは、浄土宗で高祖と仰ぐ善導大師のお書物『法事讃』に説かれ、また先にご紹介致しました、一般には「礼讃」として親しまれる『往生礼讃偈』（『六時礼讃』）の、これも善導大師のお書物の表題でもございます。

『無量寿経』上巻には、以下のように説かれます。

阿弥陀さまが法蔵という修行中の菩薩さまの折り、世自在王なる仏さまが二百一十億もの仏の国土を示されました。かように甚だ数多いお浄土ではありますが、法蔵菩薩は誓願をすべて成就せられ阿弥陀さまとなり、構えられた国が極楽浄土なのです。そしてその阿弥陀さまのお浄土へ、私達はお念仏によって往生を願う。では何故に……ありとあらゆる動植物の命を我が命としていただいたり、嘘も方便と二枚舌・三枚舌を弄し、欲を貪り、怒りや腹立ちの心を持ち、誤った見解に墮す十悪に集約される科、あるいは和を乱す行為に代表される

五逆罪など多くの罪を負ったこの私。こんな私がお念仏を心からとなえさせていただく、その事によって阿弥陀さまのご本願、本当の願いに叶い極楽浄土へと導かれる『無量寿經』に説くお言葉です。

「十方に浄土おおけれど 西方を願うは十悪五逆の衆生の生るる故なり」

多くの罪科を負う私が、お念仏によって救い取られる。法然上人のご法語の続きには「三念五念にいたるまで云々」と出てまいります。無意識のうちに重ねる罪や犯さざるを得ない罪業とは別に、意識を以て差別したりする心持ちも確かに私達の中には存在します。敢えて詳細は控えますが、「五障三従」という性別や娑婆のなかにあふれる意識した差別、これらに三念五念の数を当てておられるようであります。かような愚かさを背負う私のような者にも、お念仏によって阿弥陀さま御自ら来り迎え救い取って下さる。私の願いは善悪併せもって果てしがない、しかししっかりとこのありようを見つめ直し、ただ一向にお念仏をとなえ心をも整えていく、そこに正しく私自身の願いが阿弥陀さまのご本願に相応してまいります。

ところで「ねがい」ということに関連し、ここでひとつ思い出すことがございます。それ

は我が寺単独で子どもたちを集め、夏休み時期に泊まりがけのお寺での林間学校を催していた時のお話です。

この催しは、我が地域の浄土宗青年会という組織で毎年七月下旬、幼児から中学生くらいまでの子どもたちを対象に、二泊三日の行事として現在も続けられている伝統的なものです。が、私自身、青年会を卒業となった時分、我が寺単独での開催を発願するに至りました。多くの方々の協力を得、毎年三十名以上の子どもたちの参加を得、様々に工夫を凝らしつつ続けていくうち、ある時ふと七夕飾りということを思い付きました。普通は笹の木を使いますが、七夕の時期には、まだ笹の木が延びないので、柳の木を用いて、昔は子どもがいる家の庭先には、七夕の季節になるとどこも必ず柳の木の枝に、色とりどりの飾りや願いごとを書いた短冊が吊るされ、「笹の葉さーらさら」の歌の通り、どちらもそれはにぎやかなものでした。しかし私が「七夕飾り」を思い付く以前から、すでに農村地帯や市街地においても、ほとんど七夕飾りというものが見られなくなって久しく、これを我が寺の林間学校で参加の子どもたちにやってみようか、そんな思いが湧いてまいりました。されど時代は遷り変わり、今の子どもたちに果たして受け入れられるか、興味も湧かず退屈に思われたりはしないか……。あれこれ逡巡しつつも実施してみました。ところが案ずるより生むが易し。参加の

子どもたちには喜々として珍しいものを目にしたがごとく七夕飾りに専念、願いごとの短冊に思い思い書き込み、本堂前に立てた柳の枝にみんなで飾り付け、久々にお寺の境内は七夕飾りでにぎやかに彩られました。

「時代が違う」。そんなことが時に言われたりもしますが、温故知新、長く伝統に育まれてきた行事は、七夕飾りひとつを取り挙げてでも流行廃りなどない事実を思い知らされたのです。その願いごとの短冊一枚一枚を眺めると、子どもたちの生き生きとした、そしてより具体的な事柄が色々と書かれていて思わず微笑んでしまいました。その中、ひとときわ今も印象に残るものがございます。それは当時小学四、五年生くらいの男の子が、とても力強い字で書いた願いごとです。「りっぱなおとなになる!」。それこそ立派な願いごとでした。

私たちは幼いころから多くの夢や希望を抱き、それを実現しようと目標を立てます。「願いごと」としての希望が「誓い」ともなり、さらに実現へ向けての具体的な行動へ、そこに努力や精進の念が生じてまいります。今にして思えば七夕飾りとは、そうした貴重な体験だったのです。

ここで話を戻しましょう。最初の方で一度ご紹介申し上げました「四誓偈」というお経文

の冒頭「我建超世願」で始まる文についてです。これは「無量寿經」の中の一節で、日常よく読まれる浄土宗の代表的なお経文です。

先にご紹介のように、世自在王仏というみ仏の御前で、阿弥陀さまが法蔵菩薩の時代に四十八通りの誓願を建てられ、さらにその誓願を成就せんとする決意が、この「四誓偈」に込められており、その冒頭の一句が「我建超世願」、「われ超世の願を建つ」という御文にございます。

今一度、讃題として拝読致しました法然上人のご法語「一紙小消息」の一節を御紹介申し上げます。

「十方に浄土おおけれど」、四方八方とはよく言われますが、実は仏教では十方という方角に総称されます。いわく、東西南北の四つに下方・上方を加え六方となし、さらに東南・西南・西北・東北の四方を加えると十方となります。十方という、あらゆる方向や方角に、数え切れないほど多くの浄土があつて我々の娑婆世界を取り囲んでいる。しかしその多くのお浄土の中、西方の阿弥陀さまのお浄土である極楽世界への往生を願うのです。なぜに、先刻来の繰り返しながら、そうです「十悪五逆」といわれる罪深い私でも、極楽浄土への往生が叶うからでございます。

『阿弥陀経』には、「これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽という」と説かれます。十万億ものみ仏の世界を過ぎた処に阿弥陀さまのお浄土があり、それを「極楽」と名づけるのだと。ではなぜ、そんなに遠い処なのでしょう。この私は、多くの罪科に束縛され蝕まれた現実の娑婆世界・穢土・穢れたる世界に埋没してしまい、それが故に阿弥陀さまの極楽世界を、一層遠い存在にしてしまっている。先の「四誓偈」には「滅此昏盲闇」と出てまいります。「昏盲」、いわゆる「昏倒」とか「昏睡状態」の「昏」、煩惱の闇に閉ざされて、一寸先も見通す事の困難なるこの私、そんな私が「南無阿弥陀仏」とお念仏をとねえさせていただくことによって、西方極楽浄土・阿弥陀さまのお浄土に生まれさせていただきます、極楽往生させていただける。何となれば、お念仏は阿弥陀さまの本願に依るからである、それこそ正しく私たちの宗旨、浄土宗というお名前そのものなのです。

いろいろな方角に数え切れないほどのみ仏の国がある中、私たちは阿弥陀さまのお浄土への往生を願い、阿弥陀さまに帰命（南無）致します。元祖さまは常々、声に出してお念仏をとねえなさい、「念声是⁽²⁾」「念仏を先と為す⁽³⁾」「声につきて決定往生の思いをなすべし⁽⁴⁾」とお説きです。心には阿弥陀さまの本願とお浄土に想いを込め、口には阿弥陀さまのお名号（南無阿弥陀仏）をとねえ、身にはお数珠をかけ合掌礼拝する、身口意三業が相応するお念

仏、まさにこれ、浄土宗の教えにございます。

「厭離穢土 欣求浄土」。穢れに満ちたこの娑婆世界を厭い離れ、浄らかなる国土を欣い求める、浄土のみ教えの根幹を成す端的なお言葉です。煩惱の泥に苛まれ濁り切った中に、美しい蓮の華は開きます。否、泥沼があるからこそ、美しい蓮華は花開くのです。泥中の蓮華に、私たちは多くのことを学びます。

私たちには当然さまざまな思いや願い、そして夢や希望がある、だからこそ生きることが出来るし、また生きていく意味も生まれてまいります。私どものお寺の行事で七夕飾りに、「りっぱなおとなになる!」とお願いごとを記した、あの遠い夏の日、当時小学生だった男の子も、今や三十歳近くとなり、関東方面在住で重要な機関にお勤めであると、ご家族からうかがいました。あの、誓いにも似た願いごとは既に現実となり、遠い所で日々勤務に精を出しているであろう姿に思いを馳せる時、感慨一入のものがございます。

恐れながら繰り返します。阿弥陀さまは法蔵菩薩の地位において四十八の誓願を建てられ、長い長い年月の修行の果て、すべてを全うせられ阿弥陀仏となられました。そうして構えられた極楽浄土へ、私はひたすらお念仏をとる事によって往生させていただく。「疑いな

く往生するぞと思ひ取りて申す」お念仏、「みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う」ことが、まさに「願往生」のみ心であると受け取らせていただいております。十悪五逆の私をして確かに疑いなく撰め取ってください、その阿弥陀さまのお名前をおとなえする中に、毎日を暮らさせていただくものでございます。

お十夜には、敢えて求めずして自ら得るご利益が示されておりました。このお十夜法要に御参詣いただきました皆様に、その功德のたいなることを祈念申し上げつつ、今一度声高らかにお念仏を共々十遍、おとなえ賜りますように。

極楽は いつも月夜に十夜かな

如来恩徳 広大慈恩 同称十念

【註】

- (1) 『阿弥陀経釈』（『昭法全』・一四九頁）
- (2) 『選択本願念仏集』（『聖典』三・一二二頁）
- (3) 右 表題（『聖典』三・五頁）
- (4) 『御消息』（『聖典』四・五三八頁）

二、死ぬまで元氣 死んでも元氣

―永遠の生命と無限の向上―

土屋 正道

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く

「受けがたき人身を受け、あい難き佛法にあえり。無常念々に至り、老少きわめて不定なり。病きたらんことかねて知らず。生死の近づくこと誰かおぼえん。もつとも急ぐべし、励むべし。」と。(十念)

〔念仏往生義〕・『聖典』四・五二五頁

皆さま、「念仏と法話の会」によろこそお越しくございました。誠にありがとうございます。
す。どうぞ楽な姿勢でお聞きいただきたいと思えます。

叱られた 恩を忘れず 墓参り

私の師僧であり父親でもあります土屋光道上人が、昨年逝去いたしました。二〇一七年六月二六日、朝一人で入浴中に倒れ、私が発見しすぐに、心臓マッサージや人工呼吸をしながら救急車で病院に搬送しましたが、十時八分、虚血性心不全で八十九歳の生涯を閉じました。遺品を整理しておりましたら、手帳を見つけました。お寺の門前に掲示板があり、以前、父が黒い板に白い墨で書いていましたが、その言葉を記録したものでした。その手帳のはじめの頁に挟まっていた白い紙に、

叱られた 恩を忘れず 墓参り

原因を心にとどめる者 それが恩を知る人なり 死んでしまった人に対して

我々は力がないが　しかし死んだ人の真心が

と書かれていました。未完成の原稿です。最後に「我々を育^{はぐ}んでくださる」とでも補いましょうか？

原因を心にとどめる者　それが恩を知る人なり　死んでしまった人に対して
我々は力がないが　しかし死んだ人の真心が（我々を育^{はぐ}んでくださる）

そういえば父は、祖父観道上人が「叱ってくれる人がいなくなった」と寂しさを語ったことをよく話していました。父も「叱ってくれた」祖父を失った悲しみを感じていたのでしょう。

父は晩年、何度も肺炎で入院しましたが、そのたびに退院。不死鳥のごとく復活してまいりました。毎月の念仏会では導師を勤め六月十九日もいつもどおり力強く法話をしておりました。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私の母悦子が逝去して九十年。私は父と一緒に寝起きし食事洗濯を共にしてまいりました。理知的ですが寂しがりな父は、母を愛し頼りにしておりましたから当初落ち込みは激しく、皆さまにご心配をおかけいたしました。しかし念仏信仰が彼を復活させ、人の痛みに寄り添う心を深めて、円熟した老境を獲得したように思います。いたるところに母の写真が飾られ、毎日「おかあさん」と呼びかけていましたが、極楽で会えることを楽しみにしているようでした。時々、

「死ぬのは、ちつとも怖くない。おかあさんが待っていてくれる」というので、私はふざけて、

「いや、極楽にはもういないかもしれません。おかあさんは優秀だから、もう仏さんになって、どこか他の世界に派遣されているかもしれませんよ。」などとからかうほどでした。

実は六月二十六日の夜中三時過ぎに、父は寝室から起きてきて、夜更かししていた私を叱りました。

「何時だと思っているんだ。もう三時ですよ。早く寝なさい」

それが今生での最後の会話になりました。いつまでたっても子どものことを心配する優し

い父親であり、念仏修養の先達でした。いつかはこの日が来るとわかっていながら、「まさか、数時間後にお別れするとは……」「もつと何かできたのではなかったか？」と、私は親不孝を悔いています。

先ほど拝読いたしましたご文は、念仏の元祖法然上人のお言葉です。
現代の言葉にいたしますと、

「受けがたい人の身を受け、逢いがたい仏の教えにめぐり逢うことができました。この世の無常は刻々と迫り、死の訪れは老若を問うことがあります。すでに病に冒されていることも知らぬまま、生死の境が間近にあることも誰一人として気づいていません。とにかくにも急がねばなりません。励まねばなりません」と、いうことです。

普段あまり考えたこともない方が多いと思いますが、私たちが人として命を授かったのは稀に見る、いや、ほとんどありえないことなのです。法然上人は、「あたかも天上から糸を垂れ、大海の底に沈む針の穴に通すようなものだ」と言われます。

さらに、仏教＝宇宙の真理をさとり仏様になる教えに会う確率は皆無に等しい。「たと

えば、浮上した盲目の海亀が、大海に浮かぶ木の穴に、偶然首を入れるようなものです」と言われます。到底ありえそうもない話です。どうですか？ 自分のことをそんな特別な、選びに選ばれた存在だとはなかなか思えないですよね。

仏教では、縁起Ⅱすべては関わりあって存在している、と説きます。今、私が人間として存在しているのは、様々な、無数ともいえる条件が整った結果であり、条件が一つでも違っていたら、私は存在していなかった。あるいは、違ったものになっていたかもしれません。ですから、カタツムリやタンポポの花、ウイルスや時計、川の水や石ころなど、何に生まれても不思議ではないと考えるのです。

そして、人として生まれてもそのままではありません。

受精卵という一つの細胞が母親の胎内で分裂し続け、十ヶ月で数十兆の細胞を持つ赤ちゃんになる。生命の何億年もの進化をわずかな期間に体験して誕生するのだそうですね。そして脳神経や心臓などの細胞を除いて、一生の間に何度も古い細胞が死に新しい細胞が生まれる。私は五十八歳になりましたが、朝、髭を剃り、昼間はトイレで排泄して、夜に入浴して垢を流す。そして一日中呼吸して水を飲み食事をする。子供の頃から身体の細胞はほぼ入れ替わっているはずです。まさに刻々と変化をしているのに、自分では変わらないと思い込ん

でいます。そして、今この瞬間にも何かの原因で、例えば病いで、例えば事故で、この入れ替わりのシステムが停止するかもわからないのに、思いがいたりません。いや思考が停止しています。

師父光道上人は、よく「臨終の用心」を説いておりました。

「我々は、生が続いた先に死があるように思っている。ちやうど金太郎飴のようなものだ。死神はずっと先にいて私たちが近づくのを待っている、と思っている。しかし、そうではない。生は大海原に浮かんだ小舟のようなものだ。大きな波がかぶって小舟がひっくり返ったところが死だぞ。生と死は裏表。いいか、死神はいつもすぐ後ろにいて、隙あらば襟首をつかんで後ろざまに引き倒そうとしている。だから今このときの念仏は臨終の念仏と思わねばならない。」

彼の突然の死は、改めて私にそのことを思い知らせてくれました。

「偏に善導に依る」と法然上人が帰依された、中国・唐時代の善導大師。本堂の向かって右脇にお祀りしてありますお像がその方です。阿弥陀仏の化身と讃えられ、半金色Ⅱ上は墨

染、下は金色のお姿で表されています。彼が阿弥陀仏を讃え礼拝する『往生礼讃』という書物に「日没無常偈」という一節がございます。唱えてみますのでしばらくお聞きください。

人間にんげん 恩そう 恩ぞう 營よう 衆しゆ 務む
如に 灯とう 風ふう 中ちゆう 滅めつ 難なん 期ご
未み 得とく 解げ 脱だつ 出しゅく 苦かい 海かい
各かく 聞もん 強かう 健こん 有う 力りき 時じ

不ふ 覺かく 年ねん 命みょう 日にち 夜や 去こ
忙もう 忙もう 六ろく 道どう 無む 定じやう 趣しゆ
云うん 何が 安あん 然ねん 不ふ 驚き 懼よく
自じ 策さく 自じ 励れい 求ぐ 常じやう 住じゆう

人間はただ忙しく日を送り

日夜に命が尽きてゆくことに気がつかない。

灯火が風中でいつ消えるかわからないようなものだ。

自らの行いによって迷いの世界を経巡る「六道輪廻」は 趣き向かうところが定まらず、未だに苦しみの海を抜け出すことはできない。

どうして安心して恐れおののくことがないのか。

各々心して聞け 身心が丈夫で元気な時にこそ自ら工夫し励まして

移ろわぬものを求めて努めなさい

(筆者訳)

どうですか？

善導大師が一三五〇年前に、「自ら工夫し励まして、求めて努めなさい」とおっしゃった、「移ろわぬもの」とはなんでしょうか？

法然上人は八五〇年前に、何を「急ぎ、励みなさい」とおっしゃったのでしょうか？

阿弥陀仏の本願「私どもをお救いくださる本なる願いを信じ、「ナムアミダブツ」ととなえるものは、この世から守られ、育てられ、息をひきとる時には、極楽世界に迎え取られて、やがてブツダにならせていただく。さらに迷える衆生を救うために全ての世界に戻っていく。この「永遠の生命、無限の向上」こそ、「移ろわぬもの」であり、急ぎ念仏に励むことをお勧めになられたのです。

ラグビーの神戸製鋼や日本代表でスター選手として活躍し、二〇一六年十月に五十三歳で

逝去された平尾誠二さん。二〇一七年二月に平尾さんを偲ぶ「感謝の集い」が開かれました。彼の治療に当たった、ノーベル賞受賞者で京都大学iPS細胞研究所所長の山中伸弥さんが、弔辞を述べました。わずか六年の短い期間ながら二人は親友となり、一緒に病魔と闘いました。

（『友情 平尾誠二と山中伸弥「最後の一年」』講談社）
類い稀なりリーダー平尾さんから山中さんは「人を叱る時の四つの心得」を教わります。

プレーは叱っても人格は責めない。

あとで必ずフォローする。

他人と比較しない。

長時間叱らない。

の四つだそうです。私いつもは叱られてばかりですが、叱られる立場としても、なるほどと思えることがあります。皆さまにも、会社や学校などでグループを率いる方はもちろん、お子さんを叱る時にも参考になるかもしれません。

弔辞の最後に、山中さんはおっしゃっています。

「君のようなリーダーと一緒にプレーでき、一緒に働けた仲間は幸せです。僕も君と一緒に過ごせて本当に幸せでした。平尾さん、ありがとう、そして君のことを治すことができてごめんなさい。また会えると信じています。そのときまでしばらく。また会おうな、平尾さん」

超一流の科学者である山中さんが、平尾さんと「また会えると信じている」といいます。彼の信仰については存じませんし、凡人の私には想像するしかありませんが、細胞研究の最先端を走る山中さんが見ている「人間」が、宗教的天才でいらした善導大師、法然上人が捉えた「人間」と重なるといえますか、オーバーラップする時が来るのではないかと、何の根拠はありませんが想像しています。

極大の宇宙から、極小の量子の世界までが同じ力により動いている、という統一理論の証明が予想され、また細胞のDNAに遺伝情報を書き込まれていることが知られるようになりました。先祖は過去のものではなく、「共にある」ものであることが認識されつつあります。お釈迦さまのお悟りを科学が証明する時代になったとも言えるのではないのでしょうか。

アミターユス 無量寿 量り知れない命のつながり

アミターバ 無量光 数え切れない光のはたらき

に、目覚められた方ニブツダに、ナムニ身も心も捧げます、という、ナムアミダブツ。阿弥陀仏の選び取られた本願の念仏は、決しておとぎ話ではない、大宇宙の真理そのものに違いありません。

俗に、死ぬまで元気なことを、「ピンピンコロリ」などと言います。光道上人が突然この世を去られたことを伝えますと、お年を召された方々は「羨ましい…」とおっしゃられます。しかし、死んだら、終わりではありません。父は、生前から、

「永遠の生命と、無限の向上」を信じ、

「死ぬまで元気。死んでも元気。」と言っておりました。

間違はなく、元気に極楽浄土で修養に励んでいることでしょう。

そしていつしか、仏となつて迷える私共を救いに帰つてこられるに違いありません。不思議なことに、父が逝去した後、父との一体感を感じることが多くなりました。

そして、山中さんが平尾さんと呼びかけるように、私も光道上人に申し上げます。

「また会えると信じています。そのときまでしばらく。また会おうね…、おとうさん」と。

恋しいと 思う心は 我ならで 親のまことの 通いくるなり

逢いたいなあ、と思う心は私のものではなく、私を思う親の真実心がこちらに通ってくるのです。

親だけではありません。お隠れになったあなたの愛しい方は、いつもあなたを見守ってくれています。そしていつしか必ず会うことができます。

同称十念

三、榮えある者も久しからず

榎本 了示

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る。宗祖法然上人ご法語に曰く、

「榮えある者も久しからず。命ある者もまた愁いあり。捨て厭うべきは六道生死のさかい、願うべきは浄土菩提なり」と。(十念)

(「要義問答」・『聖典』四・三七七頁)

木枯らしに落ち葉が舞う中を、ようこそお参りくださいました。

春に萌え出た新緑が、夏には濃い緑となって枝に茂っておりましたが、秋にはきれいに紅葉して、やがて散っていくのですね。

「葉っぱのフレディー」という絵本をご存じでしょうか。大きな木の枝に生まれた葉っぱフレディーのお話です。たくさん仲間とともに一斉に若葉として生まれたのですから、最初はみんな同じだと思っていたのですが、やがて一つとして同じ葉っぱはないことに気づいていきます。ダニエルという物知りの親友が色々教えてくれるのです。それでも夏の間は、心地よい風に吹かれ、太陽の光を存分に浴びて、楽しく過ごしました。人間が木陰に集まってきて涼んでいくのをうれしそうにも見ていました。しかし秋になって葉っぱは一気に紅葉し、目前に「死」が迫っているという恐怖を感じます。そんな時、ダニエルは命について話してくれたのです。「いつかは死ぬさ。でも命は永遠に生きているんだよ。ちっとも怖くないよ、引っ越しをするんだ。そして新しい命に生まれ変わっていくんだよ」と教えられ、安心して枝を離れて地面に降り、眠りについていくといったようなストーリーであったと思います。アメリカの哲学者レオ・バスキリア博士が「命」について、子どもたちのために書いた絵本です。

散りゆく落ち葉に哀愁を感じながら、人間の命も同じだということを考えさせられます。

栄えある者も久しからず。命ある者もまた愁いあり。

栄枯盛衰という言葉があります。「平家にあらずんば人にあらず」と言われたほどに栄華を極めた平家でしたが、「驕る平家は久しからず」とも言われ、滅亡へと追いやられてしまいました。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとえに風の前の塵に同じ。」『平家物語』の冒頭の文です。

法然上人は、まさにこの時代を生き抜かれたお方でした。京の都も、その争いの渦に巻き込まれ、民衆はみな明日の命もままならぬ日々を送っていたのです。その上に、天災地変といった災害が起こり、疫病もはやる中、まさに命の儚さを思い知らされ、死の恐怖と背中合わせの日暮しでした。「かなり古いお話ですね」と言われそうですが、今も昔もこの道理に変わりはありません。

緩和ケア専門の大津秀一医師の著書『死ぬまでに後悔すること25』の中に、終末期医療病棟にやってきた患者さんのお話が書かれています。死を目前にした患者さんは、いろいろ思い悩むことを先生に打ち明けるそうです。もう一度故郷に帰りたいかったとか、家族へ思い残したことを、自分のしてきたことに対する後悔など、たくさんの方が思い出されるんですね。そんな話の中に、「先生、この先、私はどうなるのかしら」「神様や仏様は助けてくれるのでしょうか」という不安をぶつけられることもあるそうです。「痛いと言われれば、注射を打って痛みを和らげることは出来ますが、そのような訴えはどうすることも出来ません。そのことは、もっと元気なうちにちゃんと解決しておいた方がいいです。」とのことでした。

そんなに早くから死ぬときの準備をしておかなくてもとお考えの方もいるかもしれませんが、そうではありません。生き死にの問題を解決しておくことによってこそ、毎日を安心して暮らせるということです。

私は佛教大学で、この生死の問題を解決するために、仏さまの教えを勉強させていただきました。とはいえ、学問というのは難しく、こんなことを言えば先生に叱られそうですが、ほとんど右の耳から左の耳へ抜けていきました。覚えているのは入学式のことです。さすがに佛教大学というだけあって、入学式は阿弥陀さまがお祀りしてある講堂で、学長先生をお

導師に音楽法要が始まりました。大学の混声合唱団の方々がきれいな声で歌ってくれましたが、その中の一曲に、男性がソロで歌う曲がありました。その歌詞は、

人身受け難し 今すでに受く

仏法聞き難し 今ここに聞く

この身今生において 度せずんば

さらに何れの生においてか

この身を度せん

至心に三宝に 帰依したてまつる…

と、いただいた聖歌集に書いてありました。ところが、解らないことが一つありました。

「人間として生まれてくるのは難しいことですが、今すでに生まれさせていたでいますよ」「ふむふむ」、そして「その中でも仏法に出会えるのは難しいことですが、あなたは今ここに聞くことを得たのですよ」「なるほど」と、ここまでは順調でしたが、この後が解りませんでした。「この身今生において」ということは、今、人間として命をいただき、仏法

に会うことを得たこのチャンス逃したら、ということまでは解りましたが、度せずんばの「度」の字の意味が解らなかつたのです。

それでも何とか単位をいただいて、四年後に卒業式を迎えました。やはり、音楽法要で式が始まり、またこの曲が男性のソロで歌い始められました。その時に、それまで解らなかつた「度」という言葉の意味が、スーッと心に入っていきました。解れば簡単なことでした。度という字に、「さんずい偏」をつけてみたら解決したのです。「渡る」という字になります。「今このチャンスに、この迷いの世界から仏さまの世界に渡ることができなかつたら、この先何度生まれ変わっても渡ることはできませんよ」と教えてくださったのだということでした。

難しい学問はほとんど大学に置いて帰ってきてしまいました。このことだけは、最後にしっかり受け取って帰りました。

では一体、どこへ渡るのでしょうか。

捨て厭うべきは六道生死のさかい、願うべきは浄土菩提なり。

私たちは、はるか彼方の始まりがないような遠い昔から、今日に至るまで長い長い時間を経て、六道輪廻といひまして、六つの迷いの世界を抜け出せずに生き死にを繰り返してきたのでした。六道とはどんな世界でしょうか。

一つには、地獄は大罪人の生まれ行く世界で、奈落とも言います。なかなか抜け出せない世界です。二つには、餓鬼は物惜しみや嫉妬の者が生まれ行く、飢えに苦しむ世界。

三つには、畜生。道理に暗い者の生まれ行く世界。地獄・餓鬼・畜生は三悪道といって特に激しい苦しみを受ける世界です。四つに修羅といって争いの世界。五つに人間の世界。これは私たちの住んでいる世界で、唯一仏法を聞くことができ、六道を抜け出せるチャンスがあります。その上が六つ目の天上界。天国かとお思いかもしれませんがそうではなく、やはりここも迷いの世界で、悲しみもあり寿命もありますから生き死にの煩いを超えてはいません。

そうです、唯一この迷いの世界を抜け出すチャンスが、人間として生まれさせていただいた今日、只今なのです。そして願うべきは浄土菩提なりなのです。

法然上人は、

浄土宗の心は、浄土に生まれんと願うを、菩提心という。

『聖典』四・二九七頁

と申されております。極楽浄土に生まれたいと願う心をしっかりと持って、口には南無阿弥陀仏となえることが浄土宗の信仰のすべてであります。

「和尚っさん、極楽って本当にあるんやな」

住職になりたての頃、お檀家の法事参りに出かけ、おつとめの後にお斎を頂戴し、お酒も入って話が盛り上がってきた時でした。「和尚さん、極楽は本当にあるのですね」という問いに、何と答えようかと思ひあぐねていますと、「わしらは、船の底板一枚に命を預けているんや。よもやの時には地獄の底に沈んでしまうかもしれん。それでも、念仏となえる者は極楽に救われると聞いたから、毎日となえてから海に出ているんや」このお宅は漁師さんの家で、毎日漁に出る前にお仏壇に向かってお念仏をとなえていかれるとのことでした。極楽を疑って聞いてきたのではなく、本当にそう信じていいんだという返事を期待していたのです。極楽を信じられればこそ、口にお念仏がとなえられ、口にお念仏がとなえられればまた、極楽に生まれたいという心が確かになってゆくのであります。

「ええとこへいくんやで」

ある時、生まれてまだ日の浅い嬰兒のお葬式が営まれました。家族と数人の親族に見送られ、小さな棺が炉の中に入れられようとした瞬間、沈黙を破って一人の方が感極まって叫んだのでした。「善いところへ行くんだよ。」という意味です。善いところとはどこでしょう。それはすなわち、極楽浄土のことであり、阿弥陀さまどうぞ導いてくださいと願う心の表れであります。周りの皆さんも一樣に顔にハンカチを当てて、うんうんと頷きながら愛おしうに見送られました。迷いの世界から、不思議なご縁でこうして人間として生まれさせていただき、わずかな命ではありましたが、お念仏によって極楽浄土へ導かれていかれたのですから、ありがたくも尊い命であり、救われていく命でございます。

法然上人はこんなことも申されています。

人より物を得んずるに　すでに得たらんと　未だ得ざると　いずれか勝るべき　源空は
すでに得たる心地にて念仏は申すなり
〔昭法全〕・四九二頁

あるお家に柿の木があったといたしましょう。ご近所の方が通りすがりに、「今年はたくさん実をつけていますね」と声を掛けました。「はい、おかげさまで今年は豊作のようです。

そうそう、収穫しましたらお裾分けいたしますよ」と言っていたら、当てにして楽しく待っています。しかし、ひよっとして忘れられはしないだろうか、だれ彼なしに調子よく言っているのではないだろうかなどと、疑いだすと不安で仕方ありません。「お裾分けいたしますよ」と言っていたらその時に、その言葉をそのままありがたく頂戴しておけば、あとは本当に頂けるかどうかなど心配する必要はありません。極楽に往生させていただけると確信して申す念仏と、まだこれからさせていただくのですから、大丈夫だろうかどうだろうかと不安が残っているお念仏では、どちらが勝れているでしょうか。「源空」すなわち法然上人は、「私はもうすでにいただいた心地でお念仏をと覚えておりますよ」とのお示です。そこには一点の疑う余地も不安もありません。

私の大好きな小学生の作文です。

おかあさんのたまごやき

小学一年 あだち けい一

ほくのおかあさんは

たまごやきが

とってもじょうずだよ

たまごをひっくりかえすとき

おかあさんもいっしょに

とびあがるんだよ

そうすると

あまくてふわふわのたまごやきが

できるんだよ

(『いっぱいだいすきおかあさん』・佐藤浩著より)

けい一君にとって、おかあさんは無くてはならない存在です。そのおかあさんがけい一君の大好きな卵焼きを焼いてくれているのを毎日見ているんですね。愛情込めてノリノリでジャンプまでしてひっくり返してくれるお母さんを見ているけい一君には、疑うとか信じるとかいう発想はなく、絶対の絆に結ばれた関係とでも言いましょうか、疑う余地すら見当た

らない信じ方であります。

私たちと阿弥陀さまとの関係もそのようなものでなくてはなりません。すなわち、極楽はあるのかないのかという疑問すら存在しない。確かに極楽に参らせていただくのだという疑いの知らない信じ方で、お念仏を申させていたいただきたいものです。

そんなお念仏のありがたさを、身をもって受け取らせていただいた出来事がありました。これもまだ住職になって間もないころのことでした。お寺で毎月のお念仏の講が勤まり、いつものメンバーが集まり、いつものようにお念仏をとなえて、何の変りもなく皆さんが帰って行かれました。後片付けをして庫裡へ下がろうとしたとき、一人の方が急ぎ足で戻ってきました。「和尚っさん、大変や。幸っちゃんが……」息も絶え絶えに知らせに来て下さったのです。先程、さようならと変わりなく挨拶をして山門を出ていかれた幸子さんが、坂道を下りていく途中に、隣を歩いていた方にもたれるように倒れ掛かり、そのまま意識を失われたというのです。一人はすぐ近くの幸子さんの家に知らせに行き、もう一人はお寺へ知らせに来てくださったのでした。この家は、ご主人と幸子さんの実のお母さんと三人暮らしでした。すぐに駆け付けたご主人が膝の上に幸子さんを抱きかかえて救急車を待ち、病院へと搬送されて行きました。具合はどうだろうか、心配で夜も眠れぬまま明くる日を迎えました。何

の連絡ありません。「お寺だから連絡が来ない方がいいんだ。幸子さんは頑張っておられるに違いない」そう言い聞かせながらも、心配で落ち着きませんでした。

三日目の朝、知らせが来ました。「先程、幸子が息を引き取りました。すみませんが枕経をお願いします」とのことでした。「はい、わかりました」。支度をしてすぐにお家へ向かいました。しかし、お家では、実のお母さんが待つておられます。お寺の帰りに倒れたまま、意識も戻らずに逝ってしまわれたのですから、何と声を掛けていいものか。頭の中は整理がつかないままに、すぐご近所ですから、お家に着いてしまいました。玄関を開けた瞬間、奥からお母さんが走り寄ってきました。そして私の手をぎゅっと握ったのです。「ああ、どうしよう」頭の中は真っ白です。その時、「幸子は幸せでした。あの子は、お寺が大好きで、私がうかがえなくなつてから、一回も休むことなく通つてお念仏申させていただきました。その幸子が、お寺でお念仏申させていただいたそのままの清らかな心で、極楽にお迎えいただいたのですから、こんな幸せな子はいません」と目には別れの涙を溜めておられましたが、九十歳に近いお歳ながらもお元気なお母さんが、このような言葉を言つて下さいました。

「そうだ、お念仏の信仰をいただくということは、このような受け取りができるのだ」。住職としてうろたえていた私は、この言葉によって救われたのであります。この方も熱心にお

寺にお参りをされ、お念仏をしつかりと体得されていたのでありました。

私たちも、いついかなる時に散り急ぐ命であるかわかりません。極楽を願う心がドスンと備わっておれば、愁いはありません。お念仏の中に、安らかな日々を過ごさせていただきます。

四、念仏の声 思いを託し結ぶ縁

永目 眞爾

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に日く、

「会者定離は常の習、今はじめたるにあらず。何ぞ深く歎かんや。宿縁空しからずば同一蓮に坐せん。浄土の再会、甚だ近き^{ならい}にあり。今の別は暫く^{わかれしばら}の悲しみ、春の夜の夢の如し。信謗ともに縁として、先に生れて後を導かん。引接縁はこれ浄土の樂なり」と。

（「ご流罪の時門弟に示されける御詞」・『昭法全』四七八頁）

皆さま、こんにちは。ようこそのお参りありがとうございます。どうぞお楽にしてください、お耳を傾けていただければと思います。

只今、ご法要の中で、皆さま方それぞれお施主となつて、亡き方々へお念仏のご供養を手向けていただきました。それぞれに思いを寄せてのお勤めであつたことと思います。お父さまへ、お母さまへ、祖父母、兄弟、子どもさんへそれぞれの思いを寄せてのご供養、つまりは今生で多くの別れを経験されてきたのであります。「諸行無常」と説かれていますとおり人の命もまた同じく、いつかは終わりを迎えます。大切な人との別れがあり、自分もまた別れを告げるときが来る。その理は分かつていても、ご縁ある方との別れに、悲しみ苦しみというものが尽きる事はありません。

以前、働き盛りのさ中に突然お亡くなりになつた方の葬儀で、幼な馴染みの方からの弔辞がありました。

「君とこのようなかたちで対面し、突然の別れを述べなくてはならないことが信じられませんか」

と、涙を堪えながら振り絞るように読み始められました。小さいときからの思い出、本当に仲が良く、互いに切磋琢磨しながら人生を歩まれたことがよく分かる弔辞でありました。その最後の言葉が印象に残ります。

「寂しがり屋の君だから辛いとは思いますが、先にお浄土で待っていてくれ。そしてご家族同様に俺たちのことを見守ってくれ。いずれ俺たちもお浄土へ行くから、そのときは君の優しく明るい笑顔で迎えてくれることを願う。また再会できる日を楽しみに、泣くのは今日で終わりにします。本当にありがとう」

浄土宗が拠りどころとする「浄土三部経」の一つ、『阿弥陀経』の中に「俱会一处」ということが説かれています。

「諸もろの上善人と俱に一处に会することを得ればなり」

とあるように、お念仏をご縁とした者同士が、西方極楽浄土でふたたび会えると説かれています。「往生」とは、「往き生まれる」と書くように、ただ人生の終わりを表すことではなく、お念仏のご縁を結んだものは必ず西方極楽浄土に生まれ、またお念仏のご縁を結んだ者同士との再会を約束してくださる、たいへん尊い世界を表すことばです。

はじめに拝読いたしましたご法語は、建永二年（一二〇七）三月一日、法然上人七十五歳の時に四国へ流罪となる直前、九条関白兼実公が、法然上人との今生の別れになるかもしれないと、現在の京都市東山区のあった法性寺の小御堂に上人を迎えて別れを惜しまれる中あまりに兼実公が歎き悲しまれるので、これを慰めながら教えられたお言葉であります。その内容は、

会う者が必ず別れるということは世の定めであって、今に始まったことではありません。どうして深く嘆くことがあるでしょうか。過去の因縁が確かなものであるならば、「極楽に往生して」同じ蓮の台に座ることができるでしょう。浄土での再会は間もなくのことです。今の別れは、しばしの悲しみに過ぎず、春の夜のはかない夢のようなものです。信じることと誇ることも共に縁として、先立つ者が残された者を導きましょう。縁ある人を迎え取ることは浄土の楽しみです。

と、念仏者同士は別離を嘆く必要はなく、いずれ極楽で再会できるということを示されたの

であります。

当時の日本の仏教は、比叡山や高野山、南都（奈良）といった地において僧侶となり、厳しい修行をもって悟りを得ようとするもので、一般の人々に修することができそうな教えではありませんでした。そのような中、法然上人が選り取られた仏教のみ教えは、阿弥陀さまのご本願を信じ、「南無阿弥陀仏」のお念仏をとなえることで、誰もが平等に極楽浄土に往生できるというものでした。法然上人のお念仏のみ教えは、あらゆる人々の喜びとなり、次第に盛んになっていきます。

しかし一方で、法然上人のお念仏のみ教えを快く思わない南都興福寺の僧侶らが、お念仏を説くことを止めさせようと、後鳥羽上皇に念仏停止の訴えを出します。さらに法然上人のお弟子であった住連、安楽が、上皇に仕える女官松虫、鈴虫を上皇の許可なく出家をさせてしまうという出来事が起きます。この出来事で事態は悪化し、上皇の怒りに触れ、弟子二人は死罪、法然上人もその責任を問われて還俗、僧侶としての資格を剥奪されてしまいます。それだけにとどまらず、「藤井元彦」という一般人としての名前が与えられ、四国土佐への

流罪という重い刑が下されてしまったのです。

この流罪に、法然上人の教化を受けた人々は皆このことを嘆き悲しみます。九条兼実公もそのお一人です。法然上人を深く尊崇、帰依されていた九条兼実公は、上人七十五歳ということもあって（当時としては相当な高齢）、お身体も無事にはすまないであろうと心を痛められ、配所を土佐から少しでも負担の少ない讃岐へと改めるよう働きかけられたのです。法然上人がその讃岐へと出発される前日、別れを惜しむやりとりの中のお言葉であります。このご法語ですが、大変奥深いものであります。

法然上人は、阿弥陀さまの本願を信じお念仏のご縁をしっかり結んだ者は、必ず極楽浄土の蓮の台に往き生まれることができる、極楽往生の確かなことを諭され、浄土での再会は間もなくのことで、今の別れはしばらくの悲しみに過ぎないと慰めておられます。

そして、お念仏のみ教えをよく思わなかった人たちも、自分の教化の力が及ばなかっただけであると申され、信じる者も誇る者もお念仏のご縁と頂戴し、極楽浄土に先立った者が残された者を導きましよう。

先立たば　おくるる人を　待ちやせん　花の台の　半ばのこして

この縁ある人を導き迎え取るとは浄土での喜びであり、極楽往生を願う大切な要因であると示されたのであります。

法然上人は、この流罪を「かえって遠方の人々にお念仏のみ教えを説くよきご縁を頂戴した」と喜ばれていたことが、伝記に記されています。お念仏の道一筋に歩み、その生涯を捧げられたお姿が目には浮かぶようです。

九条兼実公との別れの手紙に法然上人は、

露の身は　ここかしこにて　消えぬとも　心は同じ　花のうてなぞ

と、添えられました。九条兼実公は、この法然上人のお示しを深く心に刻み、浄土での再会が確かなものになるようにと、さらにお念仏にご精進なさいました。法然上人との別れから間もなくの四月五日六一歳で、九条兼実公は往生を遂げられたのであります。

これはあるお檀家のご家族のお話であります。平成二〇年一〇月、Sさんというご婦人が往生されました。年齢も六〇を過ぎたばかり、まだまだこれからという時でありましたので、

残されたご家族の悲しみも相当なものでした。Sさんには、上は小学二年生の女の子、下に年少さんの女の子二人、三人のお孫さんがおられました。本当に仲が良かったのでしょうか。部屋には幸せそうな笑顔でお孫さんと写されたお写真がいくつも飾られていました。

Sさんの初七日の時、お勤めの後、法話をさせていただきました。「南無阿弥陀仏」のお念仏によって必ず極楽浄土に往生生まれることができます。浄土宗のお念仏は声に出すことが大切で、その声に往生の思いが乗って阿弥陀さまに届くこと、私たちの辛いとき悲しいとき、幸せなときうれしいとき、その心を受け止めお念仏の一声一声に阿弥陀さまも亡き方も寄り添ってくださること。そうして声に出すお念仏で結び続けたご縁によって、亡き方との極楽浄土での再会が果たされる旨のお話であります。

すべてが終わりお茶をいただいていた時、三人のお孫さんが私の近くに寄ってきました。三人のかわいい顔がじっと私の顔を見つめているので、

「どうしたの?」

と尋ねますと、小学校二年生のお姉ちゃんが代表して、

「和尚さん! さっき私たちの思いが、仏さまとおばあちゃんに届くって言ったよね? 本当に届くの?」

と質問されました。私はすぐに

「もちろん届くよ。どんなことを伝えたい？」

と、聞き直します。すると

「仏さまには、おばあちゃんのことよろしくお願いしますって伝えたい。おばあちゃんには、いつまでも私たちのこと見守っていてねって伝えたい！」

と、言います。なんて優しい心を持った子どもたちだろうと思いつながら、

「その思いを南無阿弥陀仏に込めて、これからも一緒にとなえていこうね」

と、約束を交わしその日は帰りました。それから中陰のお勤めがちょうど日曜日に当たり、お孫さんを含めご家族みんながお揃いでした。二七日のお勤めの時、先週子どもたちと約束したけど一緒にとなえてくれるかなと思っていましたら、私が「南無阿弥陀仏」ととなえますとはつきりした声で一緒にとなえてくれたのです。その声を聞いた時、間違いなく阿弥陀さまに、おばあちゃんに、この声この思いは届いていると感じたことを、今でも思い出します。

あれから月日も流れ、Sさんのご主人も往生され、新たに三人のお孫さんが誕生しました。今では、お姉ちゃんたちに倣い後から誕生したお孫さんたちも、またご両親方もお念仏をお

となえくださります。なんとも嬉しいことです。今はいろんな思いを届ける念仏であるかもしれません。しかし、必ずおばあちゃんを護って下さる阿弥陀さまのおられるお浄土へ、私たちを見守り続けてくれた大好きなおばあちゃんのおられるお浄土へと、ふたたび再会できることを願うお念仏にとなつていくと確信しています。

Sさんも、まだまだお孫さんたちの成長を見続けていたいと心残りであつたと思いますが、今はお念仏の声を聞きながら、目を細めながら、お浄土で、阿弥陀さまとお過ごしのことと思ひます。今までもこれから、みんなを見守り導きながら極楽浄土での再会をお待ちになつていくことでしょう。

生まれては 死ぬるなりけり おしなべて 釈迦も達磨も 猫も杓子も

一休禪師がお詠みになつたお歌のように、この世においての別れは悲しいかな避けて通ることはできません。

別れ路の さのみなげくな 法の友 また逢う国の ありと思えば

しかし、法然上人のお示しになったお念仏のみ教えは、ただの別れではなくふたたび極楽浄土での再会という尊い世界を説いたものであります。そのみ教えを素直に喜び、極楽往生を願い、お念仏をおとなえする日々を送らせていただきたいものです。

本日は誠にありがとうございました。 同称十念

平成 30 年度 布教羅針盤
所求・所帰・去行
所求 —— 極楽往生を目指して 2

平成30年 4 月 1 日 発行

発 行 浄 土 宗

編 集 浄 土 宗 教 学 局

編 集 協 力 **JP 浄土宗出版**
JODO SHU PUBLISHING [浄土宗文化局出版担当]

印 刷 (株) 共立社印刷所

表紙デザイン 藤原印刷株式会社

浄土宗宗務庁
〒 605-0062

京都市東山区林下町 400-8
TEL (075) 525-2200(代)
FAX (075) 531-5105

〒 105-0011

東京都港区芝公園 4-7-4
TEL (03) 3436-3351(代)
FAX (03) 3434-0744

<https://jodo.or.jp>

©Jodo Shu, 2018 Printed in Japan



淨土宗